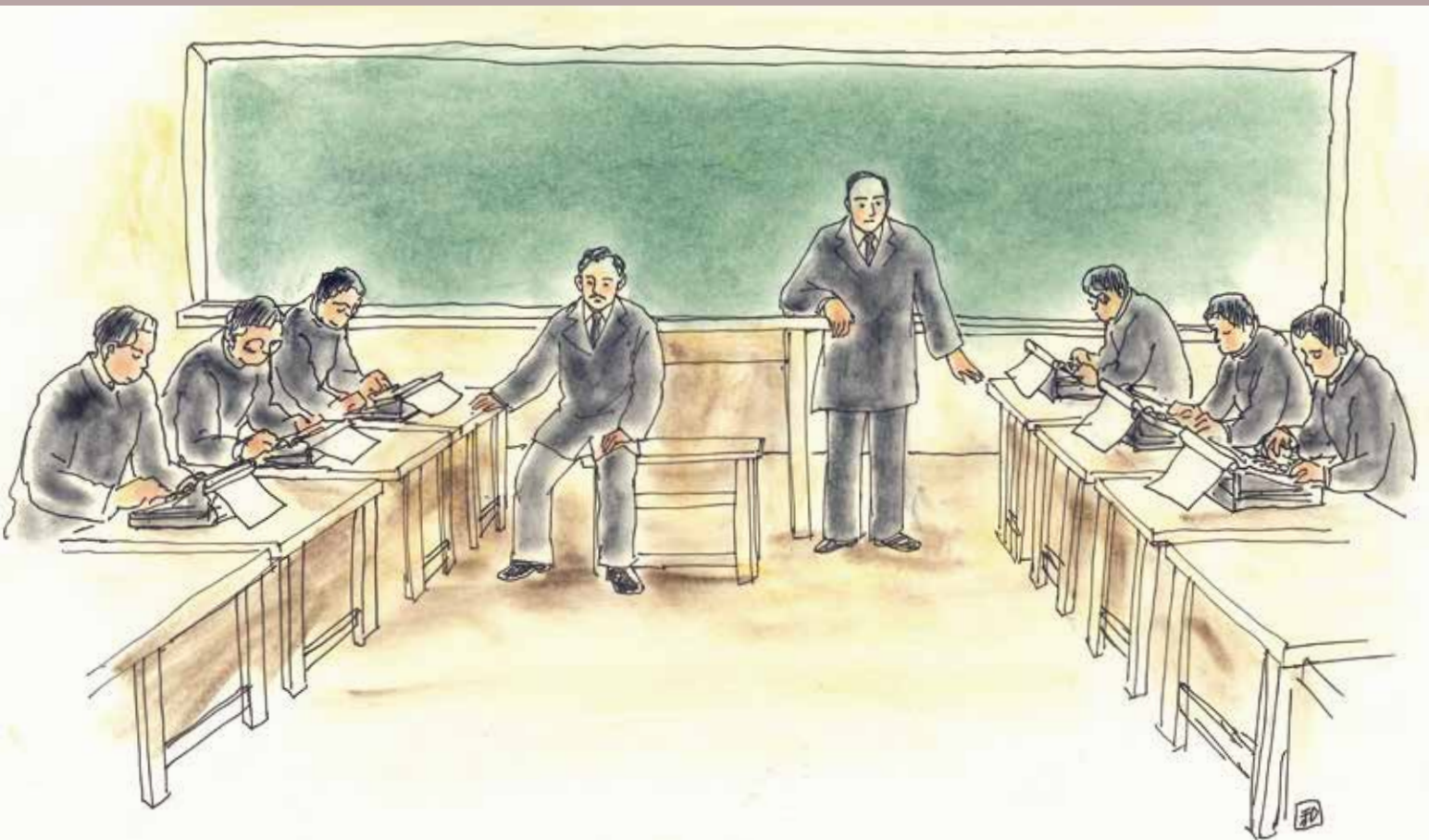


ワーク アンド プレイ イン ヤマグチケン

Work and Play in Yamaguchi Ken

おやと
御雇い外国人がみた山口

日本語版



ガントレットとサンダース
早川和子氏作画

K. S. BEAM
M. E. CHAPIN
C. G. DITTMER
T. H. SANDERS
J. E. MONCRIEFF
G. E. GAUNTLETT

翻訳・解題：北島大輔

Work and Play in Yamaguchi Ken

K. S. Beam
M. E. Chapin
C. G. Dittmer
T. H. Sanders
J. E. Moncrieff
G. E. Gauntlett

日本語版

おやと
御雇い外国人がみた山口

翻訳・解題：北島大輔

目次

(Contents)

序言	(T. H. サンダース)	1
原付自転車でめぐる山口県	(J. E. モンクリフ)	2
我が県のキリスト教布教とその従事者	(K.S. ビーム)	7
ヤマグチ紳士録	(各執筆者)	10
洞窟のある地域	(G. E. ガントレット)	15
ある日の学校	(C. G. デイットマー)	17
山口県の歴史	(M. E. ショペン)	20
愉快的気持ち ―日本式英語を読む―	(G. E. ガントレット)	22
我が病床生活	(M. E. ショペン)	23
私の隣人	(J. E. モンクリフ)	24
一つの質問	(K.S. ビーム)	26
召使いの災難	(T. H. サンダース)	26
別な料理 (人) の話	(C. G. デイットマー)	27
山口高等商業学校	(G. E. ガントレット)	28
日本の宗教	(T. H. サンダース)	30
コラム		
『Murray's Hand-Book for Japan』について	(北島)	6
福音印刷について	(北島)	9
本書のロゴデザインについて	(北島)	21
萩中学校時代のモンクリフ	(北島)	25
御雇い外国人と召使い	(北島)	27
校長・横地石太郎について	(北島)	29
訳者解題 ―ガントレットとサンダース―	(北島)	32

トマス H. サンダース 編『Work and Play in Yamaguchi Ken』は、
1914 年（大正 3）に神戸福音印刷から発行された。
全文が英文で書かれているが、本書ではこれを日本語に訳したほか、
訳者によるコラムと解題を掲載した。なお、本文が長い場合は、訳者
の裁量で節に分け、見出しを付けた。



エドワード L. ガントレット



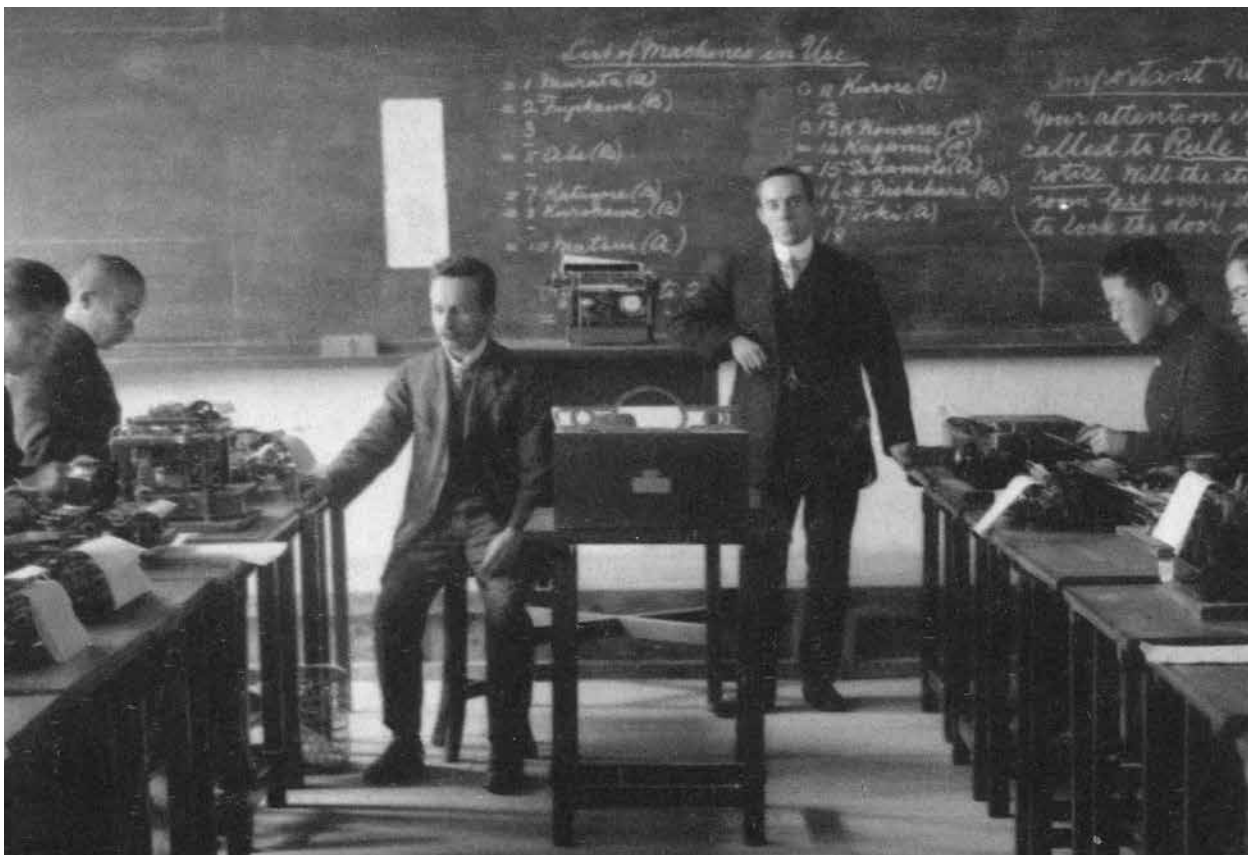
トマス H. サンドース



ジェシー E. モンクリフ
原書刊行当時は萩中学校兼任

山口高等商業学校の御雇い外国人講師たち

(山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵『大正二年山口高等商業学校卒業帖』より転載)



山口高等商業学校で教鞭をとるサンドースとガントレット

(山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵『明治 45 年山口高等商業学校卒業帖』より転載)

序言

(原題：Prologue)

トマス H. サンダース

日本のなかで最も遠く離れた地域の一つの山口県には、「母国から追い出された仲間や兄弟たち」の小さな一団がいて、そこで暮らしたり、働いていたりする。

私たちがまさにその仲間であり、まさに兄弟たちなのである。しかし、我々は異郷の民であることをさほど気にしてはいない。

私たちは東京に住んでいるのではなく、横浜でもなければ、神戸でさえもない。そのようなところでの暮らしは、ごく当たり前のことになっている。我々の住処は、山口県の山あいにあたり、海岸近くであったりする。日本の本州の最も西に位置する地域なのである。

ひょっとしたら、あなたは日本人たちが西洋の習慣を急速に採用しつつあると聞いたことがあるかも知れない。しかし、山口はそうではない。あなたは、日本は商業や産業を急速に発展させていると聞かされたことがあるかも知れない。しかし、山口ではそんなことが全くない。日本の他の場所では、工場であるとか、現代的な都市化を享受して

いて、その産業的な生活に疲れ、涙しているかも知れない。しかし、古い習慣、古い状況、古い宗教、古い政治が山口にはふんだんにある。

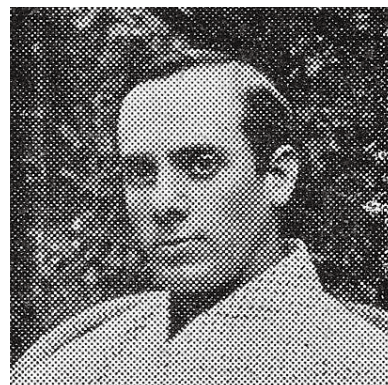
古くて趣があるだけでなく、最も美しいのが山口県である。ここには、非常に愛すべき丘陵や谷・滝や溪流、木々で覆われた谷や、岩がちな峠、松の生い茂った島や、鍾乳石の洞窟の数々が、これほどかと言うぐらい数多くあって、その種類の多さにはキリがない。

だから、ここで我々がしたことをいくつか書き留めることは、友達を楽しませたり、自らの手土産としたりするうえで、とても良いことのように我々には思える。

そして、この小冊子が世に出るのを詫びるつもりはない。私は、その理由をただお示ししたい。つまり、価値あるものと我々が見做さなかったのならば、このようなことは書かなかっただろう。したがって、もし時間の無駄だと思う方がいるとしたら、心からは本書をお勧めしない。

編者略歴

トマス H. サンダース：1885 年（明治 18）に英国スタッフォードシャー州で生まれる。同国バーミンガム大学で商学士号・商学修士号を取得した後、英国の自転車製造企業ラッジ＝ウィットウォース社での勤務を経て、1911～17 年（明治 44～大正 6）まで山口高商に赴任して英語と商業実習の指導にあたる。1917 年（大正 6）には渡米し、ミネソタ大学の助教授となる。1921 年（大正 10）には、ハーバード大学から経済学と経営学の博士号を取得するとともに、同大学の助教授となり、1927～1952 年（昭和 2～27）には教授を務める。また、1926 年（大正 15）に米国籍を取得した。1931～1932 年には、全米会計人協会（NAA）で会長を務めた。1953 年（昭和 28）に永眠。なお、サンダースについては、訳者解題も参照されたい。



サンダース

原付自転車でめぐる山口県

(原題: About the Ken on a Motor-bike)

J. E. モンクリフ

(1) 見過ごされた地域

山口県の大部分は、鉄道から離れたところにある。鉄道は県域の片方の裾部を走っているが、さほど美しいところではない。だから、そこを急ぎ通り過ぎる旅行者たちは、絵に描いたように美しい場所を全く見ることがない。

おそらく、そのような理由によるのだろうが、我々の注意をひく旅行案内書で取り上げられることはほとんどない。事実、『マレーの日本案内』(Murray's Hand-Book for Japan: 同書については、6頁のコラムを参照のこと)の最新版では、「山肌^{やまはだ}がほとんど剥き出しの丘陵によって取り囲まれ、冬は寒々として、夏はぎらつく山口には、旅行者を引き留めるものがほとんどない」と書かれてしまった。

このような記事を書いた著者は一度でも山口を見たことがあるのか、私は非常に訝しく思っている。なぜなら、山口は、鉄道(現在のJR山陽本線の前身となる山陽鉄道のこと)から8マイル離れていて、「丘陵によって取り囲まれている」ので、通過する列車からは目にするできないからだ。その主張のなかに私が見出した誤りとしては、(1)山口を取り囲む丘陵はほとんど山肌が剥き出しではなく、木々などの植物によって覆われていて、(2)山口は冬に寒々としていなければ、(3)夏もぎらついたりしていない。しかし、山口の街^{おろそ}が疎かにされているだけでなく、県のなかでも最も興味深い二つの場所もまた、2、3マイルしか離れていないのに見過ごされていて、旅行者の間で注目から抜け落ちてしまっている。

(2) 鉄道沿線の景勝地

岩国^{きんたいきょう}の錦帯橋は、鉄道から目にするできない。また、下関の美しい海峡は、敵意ある駆逐艦^{くちくかん}

の砲撃から身を守るためか、海岸沿いの線路は、後背地に設けられた一連のトンネルを出たり入ったりしてしまう。下関市に至るまで、再び出ることがないため、海峡の美しい部分を目にすることができない。

非常に軽視されたこの地域に二年ほどの間暮らすなかで、私は自らが所有する原付自転車にまたがって、2千マイルの道のりを旅してきた。だから、私は山口県の景色の美しさについて、権威をもって語れるような気がしている。

(3) 山沿いの道

最も頻繁に私が旅したのは、萩と山口とを結ぶ道のりである。私はその地域を50回は行ったり来たりしている。ある山道(山口市宮野上の八丁^{はつちよう}越^{ごし}のこと)の頂上^{たど}に辿り着いてから下り坂になり始めると、今でも身震いするような恐怖を感じずにはいられない。そこから見下ろすと、道が曲がりくねったり、急に向きを変えたり、二股に別れていたりする様子を望むことができる。歩行する旅行者はそこを這^はっている昆虫であるかのように小さく見える。

(4) 日本海沿いの景勝地

美しい道が最も長く伸びているのは、下関から萩^{はぎ}を通して奈古^{なご}へと至る道のりである。その大部分が日本海の海岸線に沿って進むことになる。かつてこの道を旅した時、海から吹き寄せる風があまりに強くて、波は高く、荒れ狂っていた。岩がちな沿岸は、とてつもなく風の勢いが強く、唸^{うな}り声のように感じるがあった。だから、ぞくぞくする光景を見るために、私は何度も立ち止まったのである。



Kintai Bridge, Iwakuni. Built about 250 years ago

錦帯橋

この道際には、ほとんどが陸地に囲まれた小さな湾が二つある。その一つは、仙崎^{せんざき}近くの湾であり、時折、漁師たちは、鯨^{くじら}を網^{から}に絡^{から}ませることで捕まえる。冬になると、直近では4匹の鯨と3匹の子鯨を捕まえたのだった。鯨が移動する途中で、閉じられた湾に入り込むのを見た時は、漁師たちにとってはお祭り騒ぎの一日となる。漁師たちは、鯨が逃げられないように追い込めるので、彼らにとっては少なからぬ幸運となる。

萩から長門へと向かう道の部分では、岩がちな小島^{みさき}や岬が立て込むようにあって、そこには曲がりくねってゴツゴツした松の木が生えている。このような木^{なが}を眺めると、剥^むき出しの岩^むのどの亀裂^{きれつ}にもしっかりと根を張っていて、生命を維持できるだけの土はごくわずかしかない。その屈強さと困難さは、見る者を不思議や称賛の念で満たさずにはいられない。私の教え子の一人は、松についての自らの感情を英語の随想として表現した。その一節は次のようであった。

「荒々しくて剥^むき出しの岩に生える松の木を見たことがあるか。冷たい北風に煽^{あお}られ、山のような荒波に激しく揺さぶられるその様を。困難をもの

ともせず、力強く、しっかりと、松はそこに永遠に立ち続ける。波が砕けると、風はその音だけを残して過ぎ去る。まるで我々に天使^{さきや}が何かを囁^{ささや}くかのように」

この道から周辺の150マイル圏内には、たった一つの火山^{かさやま}がある。この火山は笠山^{かさやま}と言い、その大きさと言ったら、まことに取るに足らない。勢いをつけて登ると20分で、噴火口^{ふんかこう}のある深さまで降りて行くには、2分もかからない。それは、非常に小さな火山の全てに過ぎず、長い間噴火活動をしていないけれど、非常に興味深い。私は、そこに6回ほど訪ねて行って、ようやく報われた気がしている。その裾野^{すりばち}は、播鉢^{すりばち}状の凹地形となっていて、その空気は周囲と比べても2、3度は涼しい。この現象は、大地の割れ目から生じる、ほとんど感知できないくらい微^{かす}かな冷たい空気の発散に起因する。この奇妙な現象は、確かにそのような場所で特有なものである。

(5) 我らが溪谷^{ちやうもんきやう} (後の長門峡)

おそらく、山口県で最も美しい場所は、阿武川^{あぶがわ}の溪谷^{あぶがわ} (後に日本画家の高島北海によって「長門峡」

と命名される)である。この溪流は、萩が位置する三角州に接続する。大きさにおいては^{すこ}はくなくけれど、その美しさと言ったら、ずっと名の知れた耶馬溪^{やまけい}(大分県に所在。漢学者の^{らいさんよう}頼山陽が称賛し、江戸時代から名所旧跡として知られてきた)よりも優れていると考えるのは私一人ではない。耶馬溪では、毎年何千人もの旅人がそこを訪れている。

しかし、「我らが溪谷」(Our Gorge)は、ずっと孤立していて、私たちはそれを独り占めする権利があるような気がしている。これを見に来る人がいれば、我々はとても嬉しいのだけれど。

ここには静かな水のせせらぎがあり、またあるところには暴れ狂った滝があり、水流の道筋は、高い絶壁の間を縫^ぬって振れたり曲がったりして、二、三百歩を歩くたびに全く新しい景色となる。遠くまで見渡せる眺望は、その愛らしさが魅力的で、絶えず変わり続ける。

いくつかの場所では、小道が水際の中に浸^ひかっている、川の流れを砕く巨大な岩を飛び越えて行かねばならない。またあるところでは、上が突き出した絶壁の上に小道が登って行くため、曲がりくねった川筋をあちこち見渡すことができる。さらにまたあるところでは、小道が全くなくなるため、鎌で道を切り拓^{ひら}かねばならない。

秋になると、極上の色合いをした^{こうよう}紅葉となり、この場所があまりに美しすぎて、相応^{ふさ}わしい表現を思い浮かべることさえできない。この溪谷は4、5マイルの長さがあり、その支流でも可愛らしい滝を数多く見つけることができる。

(6) 下関の海峡

もう一つの美しい場所といえば、下関のある海峡である。すでに述べたように、我々のいる本州島と、その南にある九州島との間にある。これらの海峡は、8～10マイルの長さがあり、1～4マイルの間隔がある。それ自体が美しいばかりでなく、絶え間なく船が往き来するのが興味深い景色となっている。何百艘もの漁船^{そう}を続け様に見ることができるし、外洋に行く大型の船も3、4隻を下回ることなく、絶えず通り過ぎて行く。アメリカから中国やフィリピンに向かう船や、ヨーロッパから極東に向かう船は、いずれもこの海峡

を利用する。

多くの日本の軍艦や、駆逐艦が通過するのを見るのも、決して珍しいことではない。かつて私は、彼らの所有する大英帝国製の軍艦三隻が、曲がりくねった海峡を誇らしげに通過するのを見たことがある。

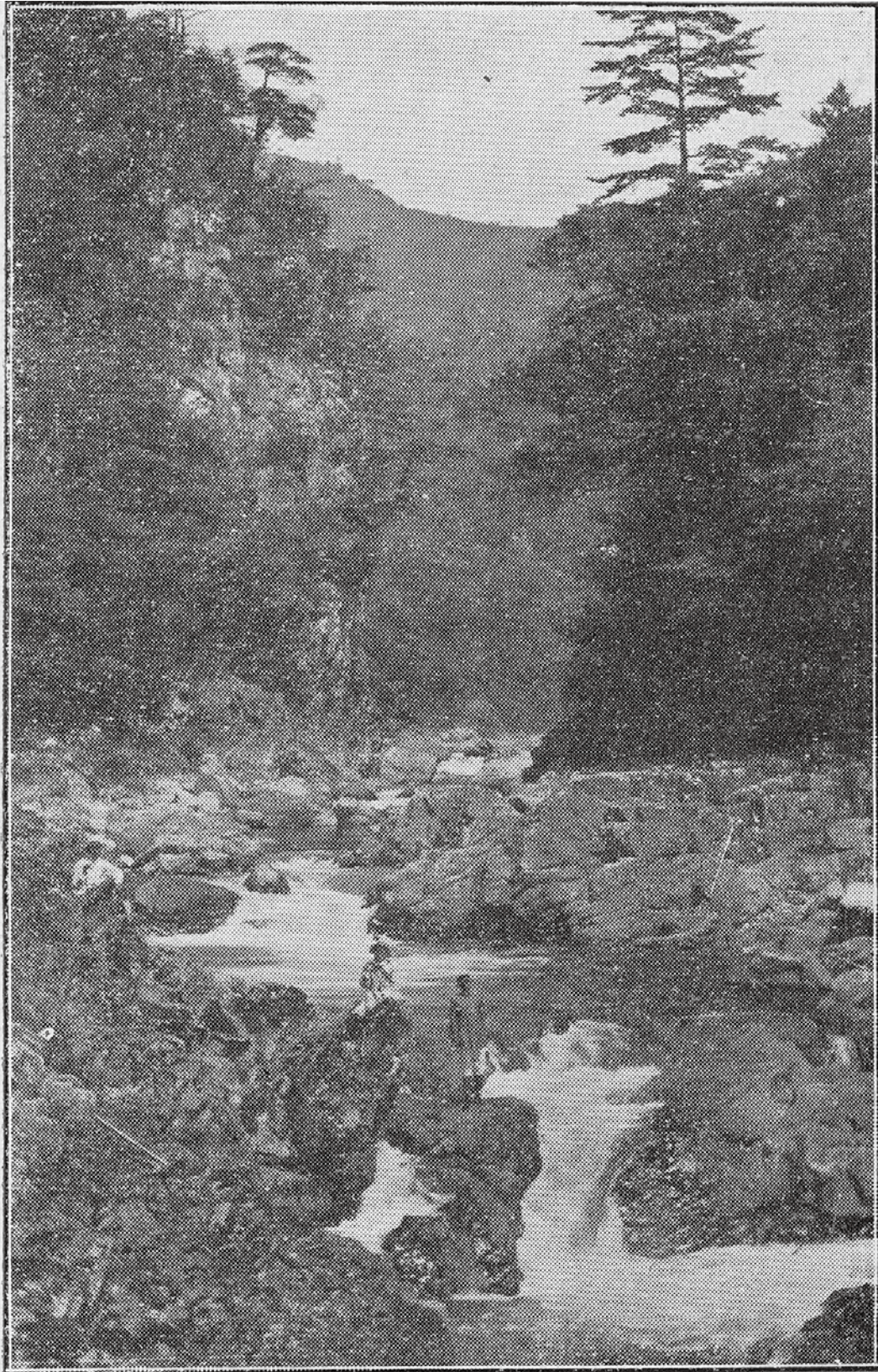
(7) 珍しい外国人

私が原付自転車にまたがって県内を旅していると、しばしば面白い経験をすることがある。日に焼けた塵除^{ちりよ}け外套^{がいとう}、トロピカルヘルメット(断熱性・通気性に優れたヘルメット型の探検帽)、大きくて赤いゴム製のゴーグル、そして6フィートもある身長のために、私を見た小さな子供を怖^{おそ}がらせずにはいられない。原動機の音を立てたり、警笛^{けいてき}を鳴らしてしたりしなくてもそうなのだ。少なくとも、この田舎^{いな}の地区に住む小さな少年たちは、私が立ち止まって道を訊ねた途端^{とたん}、一目散に逃げ出してしまう。明らかに、鬼、つまり悪魔に追いかけられたような印象を持っているのである。

(8) 古き日本の面影

たった一度だけ、旧式の^{けんじゅう}「拳銃」(ちょんまげのこと)を頭に付けた一人の男を見かけたことがある。自らの職業として習慣を持っている力士を例外として除けばの話だが。その人は、私が旅したなかでも遠く離れた地域に出かけていて、お歯黒^{はぐろ}をして眉^{まゆ}を剃り落とした女性と結婚した。このような容貌の女性も、街中では若い人々の間ではほぼ絶滅しているけれど、中心から離れた場所では頻繁^{ひんぱん}に目にするすることができる。

山口県でも内海に面する地域では、ハワイやアメリカの太平洋海岸に住んだ経験のある日本人と出会うことがしばしばあって、多かれ少なかれ英語を話すことができる。よくあるのは、言語力が低い方だが。一方、私の住む山陰^{さんいん}(当時、モンクリフは萩中学校の英語講師だった。山口高等商業学校と兼任していた)、すなわち、日本海に面した「影がち」の側では、人々はずっと古風であり、進歩しておらず、日本と友好関係のある外国からの新たな考えや他の革新的な物事に染^そまっていない。だから、ここは真の日本、古き日本を見ることのできる場所だと感じるのである。



The Uokiri Waterfall, near the "Dragon's Gate," in the Gorge of the Abugawa, about five miles from the entrance at Midobara.

阿武川の溪谷
(後の長門峡)

コラム 『Murray's Hand-Book for Japan』について

英国ロンドンに本社を置くマレー社が発行する日本案内書で、明治・大正時代にかけて日本・米国・中国でも出版され、数年おきに改訂された日本滞在外国人の必携書^{ひつがいしょ}であった。モンクリフ^{なげ}が嘆くように、第七・八版では「山口には見るべきものがほとんどない」と酷評されてしまった。現在では山口観光の目玉とされる瑠璃光寺五重塔^{るりこうじごじゅうのとう}や常栄寺庭園^{じょうえいじていえん}などの記載もない。唯一、^(巨石墓のこと)「ドルメンが考古学者の気をひくかもしれない」と記す。舟形石棺が出土して赤妻古墳が全国に知られる明治41年(1908)以前の記事であり、どの墳墓を指しているかは不明である。

いずれにしても、第九版では、秋吉村の滝穴^{たきのあな}(後の秋芳洞)や、山口町周辺の滝などが追記され、名誉回復^{はか}が図られる。本書の各所で述べられるように、山口県在住の御雇い外国人らの精力的な自然探索や顕彰活動が実を結んだのである。(北島)

Yamaguchi (*Inn*, Fujimura), capital of the prefecture of the same name and of the province of Suwō, is most conveniently reached from *Ogōri* station, 3 *ri* 1 *chō* by jinrikisha. The hot springs of *Yūda*, in the S.W. suburb of the town, possess some local fame. Some neighbouring dolmens, too, may interest the professed archæologist. But imprisoned as it is within hills mostly bare, bleak in winter and glaring in summer, Yamaguchi has little to detain the tourist.

Yamaguchi was an important Christian centre during the latter half of the 16th century, the mission there having been founded by St. Francis Xavier himself. (See Sir Ernest Satow's elaborate paper on the "Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586," in Vol. VII. of the *Transactions of the Asiatic Society of Japan*.) More recently the noble house of Chōshū, which had its seat here, became a very powerful factor in Japanese politics. Since the Revolution of 1868, the *samurai* of Chōshū have divided with those of Satsuma the chief direction of public affairs. The peasantry of the Yamaguchi prefecture furnish a large proportion of the emigrants who have been sent to Hawaii and other foreign countries during the last few years.

『Murray's Hand-Book for Japan』

(第八版／1907年発行／415頁)

出典については、巻末の参考文献を参照のこと。

Yamaguchi (*Inn*, Nakamura), capital of the prefecture of the same name and of the province of Suwō, is most conveniently reached from *Ogōri* station, 3 *ri* 1 *chō* by steam tramway in 1 hr. The hot springs of *Yūda* (*Inn*, Matsuda, Europ. food), in the S.W. suburb of the town, possess local fame. Within a radius of 1 *ri* from Yamaguchi are several pretty *waterfalls*. The prefecture is also noted for its huge *caves* in the limestone range in and near the vill. of *Akiyoshi*, (*Inn*, Ōmiya), 16 m. W. of Yamaguchi. The largest, *Taki-no-ana*, is of unknown length. Guides take the visitor half-a-mile inside the cave, which is full of stalactites and basin formations. Some neighbouring dolmens, too, may interest the professed archæologist.

Yamaguchi was an important Christian centre during the latter half of the 16th century, the mission there having been founded by St. Francis Xavier himself. (See Sir Ernest Satow's elaborate paper on the "Vicissitudes of the Church at Yamaguchi from 1550 to 1586," in Vol. VII. of the *Transactions of the Asiatic Society of Japan*.) More recently the noble house of Chōshū, which had its seat here, became a very powerful factor in Japanese politics. Since the Revolution of 1868, the *samurai* of Chōshū have divided with those of Satsuma the chief direction of public affairs.

『Murray's Hand-Book for Japan』

(第九版／1913年発行／407頁)

我が県のキリスト教布教とその従事者

(原題: Christian Work and Workers in Our Ken)

K. S. ビーム

日本は実質的にキリスト教化されていて、宣教師たちはほぼその仕事を終えており、間もなくその地から引き揚げるだろうという意見が我が本国にはある。こうした意見がどうして信頼を勝ち取るようになったのかを議論するのが、この記事の目的ではない。そのように信じられているのとは全く異なると身をもって知る者として、こうした意見があることを残念に思う。

この記事で示す統計は、本県だけのために示されたものではあるけれど、他県でも当てはまる典型的なものと考えている。本県がキリスト教化されていることを、これらの数字をもとに証明できるとすれば、地球が平らであることを証明することなど、いとも容易いことに違いない。

その一方で、これから 30 年のうちに山口県がキリスト教化するだろうと証明したいと思うのなら、それは可能性の範囲内でしかない。とはいえ、後者を証明するには、現在の統計を数えてみても仕方がない。むしろ、より大切なのは、キリスト教に関する従事者たちの意気込みや、強化、そして…、あなた自身にかかっている。

山口県の人口は 1,040,788 人がいて、このうち公的にキリストを信じていると明言しているのは 648 人である。「公的に」という言葉を外すと、実際の数倍くらいになると我々は思っていて、もし、「公的に」と「明言する」を外せば、さらにその倍になると思っている。以上で羅列したなかには、カトリック教徒は含んでおらず、彼らの数に関する情報については我々の手許にない。

キリスト教に関する従事者として、真っ先に思い浮かぶのが宣教師たちである。本県では、既婚者

の宣教師が 2 人、独身女性の宣教師が 3 人、そしてカトリックの神父が 3 人いる。ここでの布教を行うきっかけをつくったのは、現地日本人からなる 17 人の伝道師たちである。キリスト教の従事者の一覧表には、聖書教室や様々な方法で支援している我々自身も含める必要がある。

既婚者の宣教師である J. F. レイ牧師はバプティスト派で、妻と共に下関市周辺で活動を行っている。

もう一人の宣教師である J. B. アイレス牧師は長老派に属している。彼の活動は全くもって伝道的で、県内の町や村にまで広く及んでいる。アイレス夫人は、日曜学校や聖書教室、県立病院の看護師たちに混じっての仕事に従事している。彼らの家は、県庁所在地の山口にある。

独身女性の宣教師のうち二人目は、ビゲロウ女史である。彼女もまた山口に住んでいて、長老派の少女学校を主宰している。昨年に卒業した 15 人の教え子たちは、皆キリスト教徒であるという事実からも、彼女らの働きが高く効果を発揮していることをよく表している。

そして、三人目の独身女性の宣教師であるウェールズ女史や、その助手である西女史は、徳山に本部を持っている。その街を拠点として、多くの町々を鉄道で訪れて仕事を遂行するのである。彼女たちは、生徒や教師たちに向けた教室も持っているが、得意とするのは女性部や日曜学校である。

カトリックの神父たちは、萩や山口・下関で活動を行っている。2 人の宣教師、すなわちメソジスト派のスチュワート師と、長老派のヘリ



Mr. Dittmer's Bible Class, Chofu.

長府にあるディットマーの聖書教室

フォード師は、隣接県である広島からやって来て、本県のいくつかの町を度々訪れ、伝道師たちの働きを視察している。彼ら自身の教会のことを気に掛けるのに加え、ほとんど全ての伝道師たちが近くの町を訪れ、奉仕を行うのである。

上で列挙したことは、実際に行われた仕事のかなりの部分であるかのように聞こえるし、嘘やごまかしでないようでもある。しかし、聞いてほしい！山口県には、キリスト教の働きかけを全く受けていない807,579人もの人々が町々や村々で暮らしているのである。彼らの許に近づくためには、さらに既婚の宣教師4人と、独身女性9人が必要である。伝道局には、こうした人的補給をすぐさまするような様子が見えない。宣教師、伝道師、聖書教室の女性や教師を含め、35人のキリスト教従事者が本県にいる。

私はこれまで何度も宣教師たちを「従事者」と呼んできた。そして、彼らは「ある時期によってはそうであり、ある時期によっては違っている」。しかし、私は、それ以外の名前では呼ばずして、この記事を締めくくることができない。それは、早くして気づいたことなのだけれど、「友人たち」と

いう呼び方である。

宣教師たちは、私たちがここに到着してからというもの、我らを守護する天使であり続けている。日本の言葉・習慣・人々に関する彼らの知識は、我々の行く手をはばむ無数の障害を取り除いてくれる。彼らが私たちに広く自宅を開放し、少しも躊躇うことなく我々を歓待してくれたことは、こうした状況を穏やかに表現している。日本のキリスト教化に関して米国や英国にいる人々の考えが誤っていたので、宣教師たちへの考えもまた次第に歪んだものになってしまった。

我々は、彼らが他の人々と同じように、とても素敵な人々であることに気がついた。彼らのなかには、流行の最新情報に付いていくのが難しい立場にいる者もいる。しかし、世界の実際の進歩について言えば、母国の兄弟たちよりも事情に通じていない宣教師を見出すことができない。

東洋の地で暮らすキリスト教従事者やその活動の正しき地位は、前者が我々の最も親密な友人であって、後者がその最も鋭い喜びであると述べることによって、初めて気付かれるのであろう。

コラム 福音印刷について

本書を発行した神戸福音印刷とは、どのような会社であったのか。

その親会社である福音印刷合資会社の名を一躍有名にしたのは、2014年にNHKが放映した連続テレビ小説『花子とアン』である。主人公の村岡花子（旧姓は安中。ドラマでは吉高由里子が演じる）は、モントゴメリ『赤毛のアン』など海外の児童文学の翻訳で知られる。花子の夫となる村岡徹三（ドラマでは村岡英治の役名で鈴木亮平が演じる）が勤める印刷会社のモデルこそが福音印刷である。

峯岸英雄〔2015〕によると、同社は1898年（明治31）に横浜山下町で創業した。社名が物語るように、社主の村岡平吉（その三男が徹三）は敬虔なクリスチャンであり、聖書をはじめキリスト教関連書籍の出版を得意とした。平吉は、若くして欧文印刷物の写植工として腕を磨いた経験を活かし、語学に堪能な欧文写植工を多く雇い、高度な写真製版や製本装丁の技術で定評があった。横浜在住の英国人医師だったゴードン＝マンローの考古学的名著『Prehistoric Japan』〔Munro 1908〕の印刷を手がけたのも同社である。

そんな福音印刷が神戸元町に支社を設立したのは、1904年（明治37）のことである。多くの外国人が集散する国際貿易港・神戸での需要を見込んだのであろう。『Work and Play in Yamaguchi Ken』の執筆者の多くがY.M.C.A.（キリスト教青年会）の仲介で来日していることや、山口県内での英字活版印刷が困難であったこと、英語での編集打合せが容易という理由から、同社での発行となったとみられる。

平吉のもとで、若い頃から福音印刷に勤めていた徹三だが、花子と出会うのが1919年（大正8）とされる。また、1914年（大正3）に『Work and Play in Yamaguchi Ken』が発行された当時の徹三は、東京支社の責任者に就任したばかりであったから、同書との直接的な関係はなかろう。徹三が二代目社長に就任するのは、1922年（大正11）のことである。

しかし、間接的な関係はあったとも言える。

たとえば、村岡花子が若い頃に学んだ東洋英和女子学校（東京都港区に所在。現・東洋英和女学院の前身）の兄妹校にあたる東洋英和学校（東京都港区に所在。現・麻布中学・高等学校の前身）でガントレットは教鞭をとっていたことがある。また、ガントレットの妻である恒と村岡花子は、日本基督教婦人矯風会きりすときょうふじんきょうふうかいの幹部として、女性の地位向上や弱者救済をめざす活動を共にすることになる。伏線の糸のいくつかは、次第に結び付いていくのである。（北島）

【参考文献】

峯岸英雄 2015 「『福音印刷』創業者 村岡平吉の軌跡」『郷土神奈川』第53号、1～16頁、神奈川県立図書館。
村岡恵理 2011 『アンのゆりかご 村岡花子の生涯』新潮文庫、新潮社。
Gordon Munro 1908 "Prehistoric Japan", Fukuin Printing.

なお、峯岸英雄氏からは福音印刷について書面での御教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

ヤマグチ紳士録

(原題: Who's Who)

(1) ジョージ E. L. ガントレット氏

(Mr. George E. L. Gauntlett)

ガントレット氏は、手短かに言うと、趣味の人である。若き頃、彼は建築工学を専攻した。しかし、日本に来たのは、最初はオルガン奏者としてであって、次に教師として働くことであった。そして、今の職業は教師である。

彼の趣味の一つにエスペラント語がある。もう一つは速記術で、ピットマン & グレグ式に堪能である彼は、これを日本の言語にあわせて改良して、日本の帝国議会で使われている。ペン習字や音韻学おんいんがくもまた彼の趣味である。そして、彼は切手のコレクターであり、装飾文字の技術に優れ、探検することにおいては疲れ知らずである。彼はまた、イギリス王立地学協会の会員である。

ガントレット氏はまた優れた音楽家であり、毎週日曜日の朝は、自邸で英国式教会を開いていて、週末に山口を訪れる楽しみの一つともなっている。そこで彼は、オルガンそうしや奏者の役目を果たすのである。

これらの趣味には、高度な正確さが必要とされるので、読者は、きっとガントレット氏が体系立てて物事を進める人との結論を下すことだろう。体系を具現化するための、カード式目録や、対照表、ファイル、ゴム印、アルファベット順や年紀順の資料収集やデータ分類をするなら、私はエドワード = ガントレット氏を推薦する。

さらにいえば、彼は途轍とてつもない活力の持ち主である。多くの商取引を行い、それらにおいて高度な技量を獲得している。我々の多くが、一つや二つのことをこなすのに、ガントレット氏は六つぐらいもやってのけるのである。

彼は、我々の集団のなかで唯一の家庭持ちである。魅力ある妻と五人の子供に恵まれている。最後に



Mr. G. E. L. Gauntlett.

G. E. L. ガントレット

付け加えておくと、この冊子が出版される時点で、日本の天皇から旭日勲章きようじつくんしょうを授与された唯一の会員である。

(J. E. モンクリフ)

(2) J. E. モンクリフ氏 (Mr. J. E. Moncrieff)

ひょっとしたら読者は、偶然にも山口と萩とを結ぶ美しい道に沿って旅をするかもしれない。急いで行きたいのなら、頭の切れる用心棒として彼を連れていくのが良い。チェシャ猫 (『不思議の国の

アリス』に登場するような猫。イングランド西部原産)のような微笑^{ほほえ}みを浮かべながら、原付自転車にまたがって、カーキ色の服に身を包んだ身長6フィート、腰回り3フィートの容貌をした人物である。「頭の切れる用心棒」のことを私が口にしたのは、油断した旅人は、険しき頂上に登る際に厄介事^{やっかいごと}に突然遭遇しがちであるからである。

J. E. モンクリフ先生の奇妙な姿形といったら、亜酸化窒素ガ…(亜酸化窒素ガスは人が吸うと陶酔させる作用があることから、笑気ガスとも呼ばれる)、いや、私は笑顔と言いたかったのである。

モンクリフの体は、細胞組織^{けん}と腱と筋肉と、気立ての良さからできている。くたびれる道端^{みちばた}では、彼の原付自転車に取り付けたロープを使って誰でも助けるように、人生にくたびれた人に対しても、時宜^{じぎ}を得た言葉や、良い事例を挙げて助けたりもする。

彼の小脳^{じんじょう}は、日本人からの冷やかしを受け入れるのに尋常でない包容力^{ほうようりよく}をもっている。私はピックアップな意味で話をしている(肥満による睡眠時無呼吸症候群をさす。ここでは、外国人に対する誹謗中傷^{ひぼうちゅうしょう}への我慢^{がまん}を遠回しに表現する)。彼は山口に



Mr. J. E. Moncrieff.

J. E. モンクリフ

いる友人たちを訪ねる時には、いつだって沢山のそれを頂戴^{ちやうだい}する。彼が乗る原動機自転車の原動機の音は、子供たちや馬、蝶^{ちょう}などを驚かせる。しかし、彼が訪ねて行った先では、可愛らしく、愛らしく、魅力的との評判を子供たちの間では少なくとも得るのである。

彼は、ユナイテッド・ステーツ(アメリカ合衆国)から歓呼して迎え入れられたけれども、未だ統一されていない状態にある(日本で受け容れられていないことを遠回しに表現している)。しかし、彼がニュージーランドにいたことがあるように、この特に新しきこの土地(newsly land)で、彼が受け容れられる日が来ることを切に祈っている。

彼はどんな名前でも呼んでも返事をしてくれる。モンクリフ、ジェシー、ハギ、ハギさん(モンクリフが萩中学校勤務であることに因んだ渾名^{あだな})など。けれども、名前の最後にfを二つ重ねることだけは忘れていけない。

(G. E. L. ガントレット)

訳者追記 萩中学校のモンクリフについては、本書 25 頁のコラムも参照されたい。

(3) M. E. ショペン氏 (Mr. M. E. Chapin)

ショペンは、口髭^{ひげ}を生やし、骨折した足を持つ Y.M.C.A. の教師である。これら二つの境遇の間に何らかのつながりがあると言いたいのではない。けれども、今述べたことは、ショペンであることを日本で特定するには、これからもずっと十分であるに違いない。口髭は、それを生やしたからで、骨折した足は事故によるものである。いずれも日本製ではある。彼がそのどちらかになる前に、我々は彼のことを好きになった。その両方になって、我々の称賛の念はますます高まったのである。

ショペンは、自らに油を差し、ボールベアリングのように滑らかに物事を進めることのできる気性で、どこにでも適応し、錆びつかないことが保証されている。

彼は周りの雰囲気^{きふき}に混乱を作り出すことなく、切り抜けることができる。上記のような雰囲気が賛同できないような場合であったとしても。彼が



Mr. M. E. Chapin.

M. E. ショペン

橋から転落した時でさえも、日常の訓練として、そのような曲芸をする習慣があったかのように、平然と振る舞えるのだ。

我々は、ショペンについて言うべきことがもっと多くある。けれども、彼は今でも病院に入って留守にしているので、不当に有利になっているようにも思える。覚えておいてほしい主な点としては、彼の口髭と、彼の物腰である一三年もの間、日本のある町で、ほとんど一人で暮らし、そして骨折していても、物静かで、心乱されないというその姿。

(K. S. ビーム)

(4) K. S. ビーム氏 (Mr. K. S. Beam)

ビームの前任者は、^や痩せて、先見の明がない人だった。その人はまた並外れた^{ほおひげ}頬髭と、たいそうな女性恐怖症であった。しかし、1911年8月に中国から来た船が横浜に^{いかり}錨を下ろした。そして、三人の新米教師が上陸した。岩国での新たな一日の夜明けである。ビームは、ウエストバージニアに

ある丘陵の出身で、ワシントン & ジェファークン単科大学という知識の丘にも登ったことがある。

日本に着いた最初の日から、彼は友人との関係を育んできた。富士山の中心に近づく程に、親密な関係を築いたのである。彼の家は、宮殿のように素晴らしい。そこには電気の光こそないけれど、暖炉や外国式の浴槽^{よくそう}がある。彼は、残りの我々と歓談する。慢心した貴族のような雰囲気^{そえぎ}を漂わせることなしに。彼は、自らの名前に恥じない行動をする。添木 (a stick) という意味において。

さらにもっと適切なことには、彼は「陽気な微笑^{ほほえ}み」(a beam of sunshine) と呼ばれる。次のようなアクロスティック (各行頭の文字を並べると別な意味をもつ^{ゆうぎし}遊戯詩) が彼を言い当てていよう。

Knowing (物知りで)

Straightforward (正直で)

Brimful (縁までいっぱい)

Enthusiastic (熱心で)

Appreciative (好意的な)

Mixer (社交家)

(M. E. ショペン)

(5) C. G. D. ディットマー氏

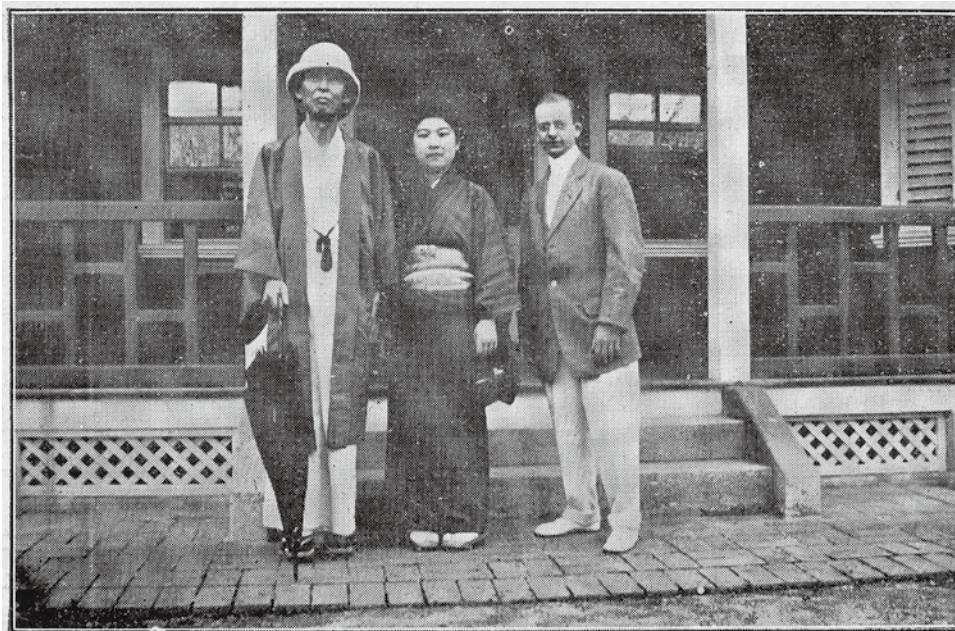
(Mr. C. G. D. Dittmer)

私がまだ幼き少年であった頃、アメリカ合衆国の州の名前を覚えなければならないことに飽き飽きしていた。これらは名前だけのようにも思え、中部にある州などは、他と比べても意味がないように見えた。

しかし、我が友人ディットマーが、我々の集まりに来るようになると、ウィスコンシン州の名は、私の中で名声を勝ち得ることになった。今となっては、ドイツ人たちが移住したことで少なからず重要な場所であることを知った。そうした人たちの間にディットマーがいた。彼はまた、一部に英国人の血統があることに誇りを持っているのだけれど。少なくとも、英国人である私に彼が語ったところでは。

ディットマーに関することは、たくさんある。そのことに関して書く余白があれば、さらに書くのだけれど。主要な点としては、次のとおりである。

第一に、彼がどこへ行こうとも、いつだって笑顔



Mr. K. S. Beam, and pastor of Iwakuni Church.

K.S. ビーム

を浮かべて^{あいざつ}挨拶をする。長府にある、元から荒地であつたところを彼と一緒に歩いている時、彼の教え子や同僚の教師たちと出会うと、彼を見る前からニコニコと笑っているのを見ることができる。それには、十分な理由があるに違いない。

第二に、ディットマーの家は、とても美しい場所に位置していて、下関の海峡を見渡せ、^{なみうちぎわ}波打際に近いところにある。彼の家のベランダにもたれかかり、着物を着て、^{あんらくいす}安楽椅子に座っているのは、全くもって至福の喜びである。ディットマーの優しい人柄を保ち続ける価値のあるものだ。彼は、なぜ私が彼のことをそんなに愛しているのか、しばしば不思議に思っている。今や、彼はそのことを知ったのである。

第三に、ディットマーがシャツやネクタイにかける経費は、相当な額であるに違いない。これ以上言うのは、非常に無礼となるだろうから、やめておこう。

(T. H. サンドース)



Mr. C. G. Dittmer.

C.G. ディットマー

(6) トマス H. サンダース氏

(Mr. Thomas H. Sanders)

見よ。「権威はいかに地に落ちたか」を。たわいもない空想や愛想^{あいそ}の良い理論は、全くもって蹴散^{けち}られ、安息の地など全くないことに気づくのである。

トムが山口県に来るまで、我々のような米国人は英国人のことを全て知っている気がしていた。彼らはお堅く、冷淡で、一緒にことをなすのが難しく、友達にはなりえないと思っていた。ああ、彼らはそのような気性を持っているのである。もちろんのことながら、ガントレットのような人がいて、彼のような例外を除けば、このルールが正しいことが証明されていた。私は、トムの到来を、冷やかし気味に待っていたのである。

そして、トムはやって来た。衝撃に次ぐ衝撃。理論は揺らぎ、空想は地に落ちた。最も楽しげで、幸せそうで、社交的で、彼はいつもそこにいたかのように、いとも容易く、自然な感じで、私たちの

暮らしのなかに溶け込んだのだった。そして、彼はそこにいるためにやって来たのだった。彼は、善良な人間味と素晴らしい感性で、我々の心のなかに居場所を見つけたのである。

ここで、彼の生い立ちを紹介したい。彼は英国で生まれた。そのどこであったかを私は知らない。彼はいくつかの学校を優等な成績で卒業したが、奨学金を得て、バーミンガム大学に入学した。彼は、新設された商学部で学位を取得した一人である。そして、彼はラッジ=ウィットウォース社（英国に拠点を置く自転車製造会社）の私設秘書から経営部長となった。そして、彼は、山口高等商業学校の教師となる任命書を受け取り、一気に日本へとやって来たのである。

私は、非常にこっそりと付け加えておきたいのだけれど、アメリカ人のことについて幾つかのことを学んでいて、それでもなおアメリカ人のことが好きと見える。

(C. G. ディットマー)



Mr. T. H. Sanders.

T.H. サンダース

洞窟のある地域

(原題：The Cave District)

G. E. ガントレット

山口県で最も興味深いのは、県中央部にある石灰岩の台地である。日本にある丘のほとんどとは異なり、木々が生い茂っていないが、何千もある小さな白い岩々で覆われていて、朗らかな気持ちにさせる墓地のようである。台地全体が飲み込み穴 (swallow-holes) や窪み (pits)・洞窟^{どうくつ}によってハチの巣状の地形となっている。くぼみのなかには、何百フィートもの深さをもつものがあり、洞窟のなかには数マイルに及ぶものがある。

最も深い椀形のくぼみの底には、片側から小川が流れ込み、もう一方へと出ていく様子がみられ、「帰り水」と呼ばれる。また、小さな窪みのひとつは「地獄穴」と呼ばれる。

しかしながら、その地域で最も心ひかれるのが洞窟で、20 ぐらいが存在している。

洞窟のなかで最も大きいもののひとつが「景清洞」で、宮ノ馬場の近くに所在する。ここでは、二つの小川が一つの谷へと流れ落ち、丘の下にある二つの入り口を経由して消えてゆく様子を見ることができる。3～4 週の間雨が降らないと、これらの洞窟のひとつに立ち入ることができる。それは、まもなく非常に狭くなり、手足をついた状態でしばらくの距離を這い入らなければならないが、後に広い空間となり、1 マイルぐらいは高いトンネルを移動した後、丘のもう片側にある非常に立派な開口部が現れる。この洞窟から分岐する支洞の一つは、かつて兵士たち (平家の落武者を指すとみられる) の一団によって敵から身を隠す場所として使用されたこともある。

この洞窟の近くには、小さな穴があり、雨がちな季節の後には、そこから強烈な風が吹き出す。

明らかにこれは、穴と接続する地下の小空間へと水が押し寄せることによって引き起こされた現象とみられる。

洞窟のなかでも最も興味深いのが「瀧穴」である。これは秋吉村のなかにあり、それ自体は、台地を分け隔てる谷の南端に位置する。

この洞窟の入り口は約 40 フィートの高さがあるが、ここを入るとすぐに天井がずっと高くなり、ある所では約 100 フィートにも達するに達しない。洞窟から入って程なくすると、素晴らしい鍾乳石^{しょうにゅうせき}や石筍^{せきじゆん}によって形作られた壮大な教会のように見える。100 ヤードか、そこまで至らないくらいのところまで歩くと、三途の川 (Styx) を思い出しながら小舟に乗り込んで、川沿いに棹^{さお}さして進まなければならない！ 川上りの最後には、床一面に形成されたすばらしい水溜り^{みずたま} (石灰^{かいだんきゆう}華段丘の百枚皿のこと) に心打たれる。それはかつてニュージーランドにあったピンク & ホワイトテラス (1886 年の火山噴火により埋没) のようである。このような構造は、洞内の何ヶ所かで見ることができる。

もうひとつの場所は、「高^{たか}棧^{さじき}敷^{しき}」と呼ばれ、完璧なまでに水平で、規則的な棚^{たな}状地形が 12 ヤードの長さになり、その反対側では、「花庭」に至る小さな空洞へと案内人が姿を消すのを見ることができる。花庭は、小さな空間で、かつて飾られていた鍾乳石の多くは、不幸なことに奪^{うば}い去られてしまっている。その入口から 1/4 くらい進んだあたりに、巨大な石筍^{せきじゆん}の柱がある。それは絶対的に真っ直で、なおかつ規則的であり、高さ約 60 フィート、直径 15 フィートある。これはその洞窟

の支洞にあり、洞内に沿って流れる川の経路からは離れたところにある。「金柱」^{きんばしら}（後に皇太子時代の昭和天皇によって「黄金柱」と命名）と呼ばれる円柱を通り過ぎると間もなく、通常の観光客が興味を持つような景色は最後となる。鎖^{くさり}を使いながら、急峻^{きゅうしゅん}で滑りやすい岩々を登り、幅2フィート、長さ6ヤードの小道を通り過ぎると、道の端からはオーバーハングしているように見える、すばらしい下り坂に行き当たる。この穴は150フィートの深さがあると言われる。私はまだ一度もその底を見たことさえない。しかし、何人かの人々はロープを使って降りたことがあり、しばらくの間歩き続けたことがある。

その主要な洞窟は、実質的にはこの支洞のある所を越えて訪ねたことはないが、さらに続いていくと言われている。

秋吉村の北西にあたる別府村には、「兼清穴」と呼ばれるもうひとつの洞窟がある。深く、極度に冷たい水が入口に立ちはだかっているために、ほとんど中へ立ち入ることができない。二、三年前に私は小舟^{やと}を雇って入ったが、この洞窟が最も興味深いものの一つであることを発見した。二時間以上かけて探検したところ、あきらかにいくつかの支洞があるようだったが、立入る時間がなかった。その中には、指ほどの太さの鍾乳石が言葉通り何千もあった。それは、美しさにおいて優れていて、どれもが見るべきものであった。



Entrance to the "Waterfall Cave,"
near Akiyoshi.

滝穴の入口
(後の秋芳洞)



The "Pillar of Gold," in the "Waterfall
Cave."

滝穴の金柱
(後の秋芳洞の黄金柱)

ある日の学校

(原題：A Day at School)

C. G. ディットマー

日本の英語教師は、目新しいだけでなく、忙しい。奇妙で、新たな経験であるのと同様に、困難で当惑させる問題に満ち溢れている。私がまだ寝床から出ないうちから仕事が始まる。私は日本家屋に住んでいるのだけれど、夜に閉めていた木戸を開ける音で目が覚める。隣の部屋に住む少年が、畳の上をバタバタと走る音がして、寝具を畳んで、寝室を勉強部屋に変えるのだ。私は、その日の授業のことを考え始める。低学年の少年たちに教える新しい単語や一言は何にしようとか、高学年の少年にはどんな話を聞かせようとか、英語という無味乾燥で、困難な科目をどうしたら興味をもってもらえるかを考えるのである。

500 人もの生徒たちは五つの学年に分けられ、それをさらに二、三の学級に分けられる。私は、そのいずれの学級にも週に一、二回は教えることになっている。このように、新しくて、幅広い内容について教える準備を続けなくてはならない。英語は彼らにとって難しい。彼らは、一回きりの間違いを冒すのではなく、ひっきりなしに同じような誤ちを繰り返すので、私を落胆させる。しかし、彼らは明るく、楽しげで、とつても一所懸命に取り組むので、彼らを教えることは楽しいことでもある。

勉強は、ABC から始まり、様々な読み物や、綴り方、会話、文法、作文を学びながら五年目へと進む。その頃になると、簡単な会話ができるようになったり、かなり難しい読解ができるようになったりすることが期待される。五年間のうちに、そうなることが期待される。しかし、日本語は我々の言語と全く異なっていて、同じ考えを表現するのも相当に捻れているので、哀れな生徒たちにとつ

ては、相当な厄介事となる。「コートー」と呼ばれる高等学校でさらに三年間学んだとしても、自らの考えを表現することが難しいと彼らは感じている。この帝国に住む生徒たちはみな、3 年から 12 年まで英語を学ぶことが義務付けられている。帝国大学で学ぶ課程では、英語・フランス語・ドイツ語で講義がなされる。日本では、誰もがみな英語を学ぶが、誰も英語で話すことができないように思える。

それでは、今度は私と一緒に学校へ行ってみよう。私が通勤する道は、何年前からあるのか誰も知らない程に歴史がある。両脇にある壁の基礎は、おそらく 500 年は経っている。古い封建的領主に仕える家来たちがかつてここに住んでいて、いくつかの大きな門が今も残っている。しかし、今となつては、慎ましやかな労働者たちが暮らす、最も惨めな住宅部分の玄関となっている。

ずっとずっと前のことになるが、大名町、つまりは家来たちが暮らす通りは、もっとゆったりとして便利な一角へと移転したのである。

この通りはかつて、城の前庭へと至る参道であった。そのような道が我々の眼前にあるのである。幅広い道があり、海に向かって突き出た岬からは長府湾が広がり、その反対側には下関海峡が見える。海を見渡せる岩がちな場所には、かつて領主が建てた城があった。その白壁や、何層もの屋根をもつ建物が海峡の入口を守っていた。外国籍の軍艦がやって来るまでは、そこを掌握する権利を主張していたのである。しかし、銃眼付の胸壁や、強力な壁を除けば、今や何も残ってはいない。過ぎ去りし日々の記憶が詰まっている、まさにこの

ように著名な古跡に学校が建っている。外国人に向かつて反抗したまさにこの場所で、外国のことが学ばれ、外国人自身がみずからの言語を教えにやって来ているのである。

日本の中学校をもし一つでも見たことがあったのなら、それが全てである。その立地や平面形は、どこも似たり寄ったりであるからだ。

あなたの目の前には、教練場が広がる。なぜなら、中学校というのは、全ての軍事学校の始まりであるからだ。生徒たちは制服を着て、毎日のように軍事教練を受ける。

学校それ自体には、校庭が広がっていて、建物のほとんどは一階建てで、幅狭で細長い造りである。中心的建物には、事務室や教官室、図書館などが含まれる。これを取り巻くように、教室がある。それは一学年につき、いくつかの部屋に分けられていて、生徒たちが教師の許を訪ねるのではなく、生徒たちの許へ教師が向かうのである。片側の離れた場所には、大きな寄せ集めの部屋があり、その庭の後ろには寄宿舎がある。実験室には何でも取り揃えてあるけれども、生徒たちがそれを使うのではなく、教師が実演するのをただ教えられるだけである。

日本の柔道が教えられる柔道場へ行くのを忘れてはいけない。あなたは、血も凍るような叫び声がそこから発せられるのを耳にするかもしれない。少年たちが長い二本の剣を手にして旧式の剣術を学ぶのは剣道場である。

通常の中学校の外見は、さほど素晴らしいものではない。建物は低く、ずんぐりとしていて、多くの中庭のなかに散在している。そして、日本の風習に従って、壁は塗られていない。我々外国人の目から見ると、ちっとも学校らしくないのだけれど、何百人もの制服を着た生徒たちが散らばっているので、何か取り違えた気になる。

今度は教官室に入ってみよう。そこでは、教員たちが机に着いて、本日の授業の準備をする。

まず、部屋に入る時に、深々と御辞儀するのを忘れてはならない。我々外国人は、日本のしきたりに従わないと無礼だと思われがちである。しかし、我々がそうでないと気づいた時には、高く評価してくれる。

ラッパが鳴り響くと、生徒たちは、長い縦二列になってそれぞれの教室の入口に整列する。我々は学級帳と鍵を持って行き、我々が近づくと先頭の生徒が「気をつけ！」と叫ぶと、生徒たちは皆、気を張り詰めて背を伸ばした後、前屈みになって御辞儀をする。我々は、あまり力を使わずに挨拶を返し、教室の中に入る。生徒たちが教室に入ると、もう一度「気をつけ」と言って、今度は「礼！」と叫ぶ。そうすると、机すれすれまで生徒たち全員の頭が下がる。この挨拶のお返しをしたうえで、本日の授業が始まるのである。

もし、一、二年生の授業をする時は、通訳者が我々に伴う。彼を通じて新しい語句の説明がなされ、音韻学に基づいた訓練がなされる。少年たちは、どんな新しい語句にも注意を払い、外国人に対して強い興味をもち、彼らに対して教えること全てが楽しみである。

上級の学年になると、通訳者を介さずとも十分うまく理解することができるようになる。英語らしく読む練習のほか、捻れた日本語的表現にならないように英語の作文を行ったりする時間が虚しく費やされる。このような少年たちに向けて物語が話されるのだが、英文学から抜き出した有名で古い単純な筋書きを簡単に要約したものが多く、それらを元にした作文や会話、書き取りの練習がなされるのである。

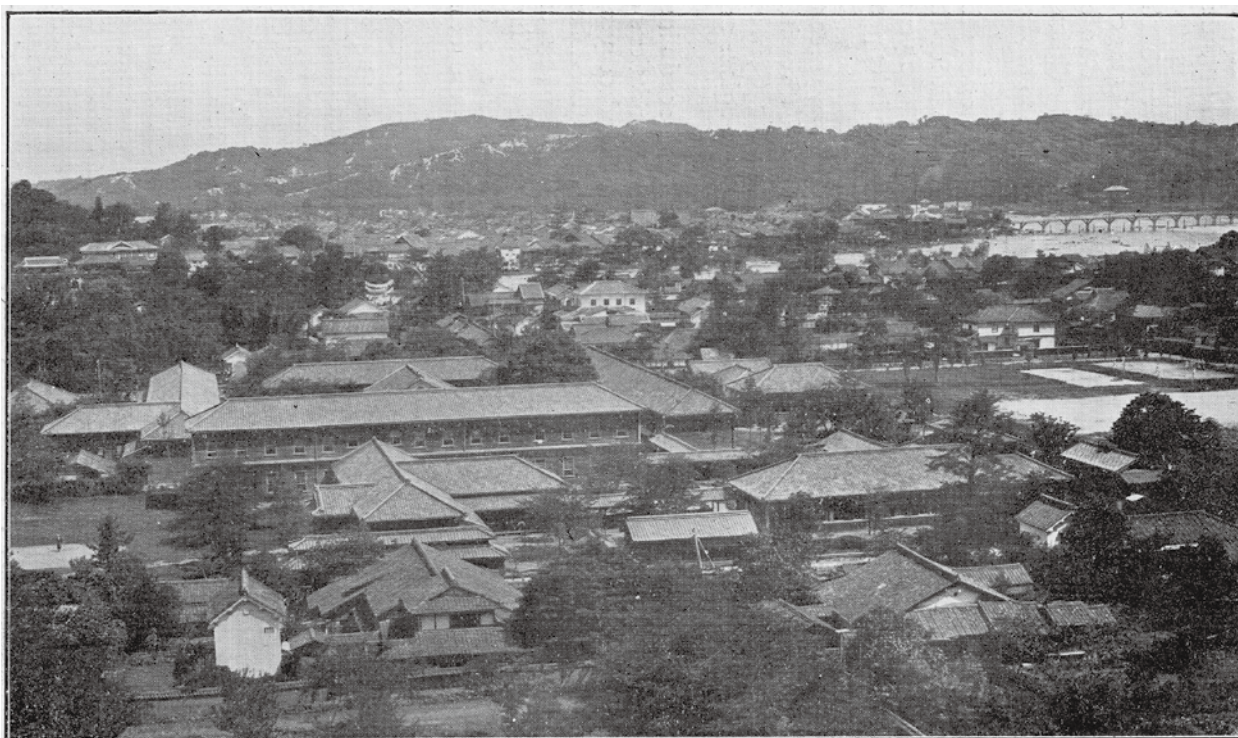
それぞれの少年たちには、低くて非常に粗い作りの机があてがわれるが、座ってみると快適である。そこには少年たちの名前を示す木の札が取り付けられている。川口 (river-mouth)、竹野 (bamboo field)、松本 (pine-tree points)、松山 (pine-tree mountain) などがあるほか、その組合せには際限がない。どの日本名にも意味があるのだ。その名前は、我々には奇妙に聞こえるが、我々がそれを発音しようとする、彼らにとっても奇妙のように聞こえてしまう。

毎日、学校で六時間を過ごす。これには一時間の昼食時間や、50分の授業につき10分の暗唱時間がある。授業の後には、柔術と剣術の時間となる。一週間に一度、上級生たちは軍事教練があり、生徒たちは銃やベルト銃剣などを装備する。先頭に立つ軍事的な指導者は、きらりと光る剣や輝く

勲章・装飾品を身に付け、勇猛に見える。

そして今や、最後のラッパが鳴り、帰宅する時間となった。もしかしたら、我々には聖書教室や Y. M. C. A. の会合が家であるかもしれない。ほんの少しの上級生たちが参加することだろう。他の生徒や教師たちから揶揄からかわれるので、生徒たちの多くはキリスト教に対してあまり乗り気ではない。

しかしながら、山口県では、権威者の態度はいたって好意的で、学校外の時間で外国人教師たちが何をしようとも好きにさせている。聖書教室の会合に出席する 30 ～ 40 人の生徒たちは、ほとんど例外なく学校で良い成績を上げている。だから、最後の時間は誰にとっても幸せで、一日を締め括しるにはちょうど良い。



Iwakuni Middle School

岩国中学校

山口県の歴史

(原題: Historical Notes on Yamaguchi Ken)

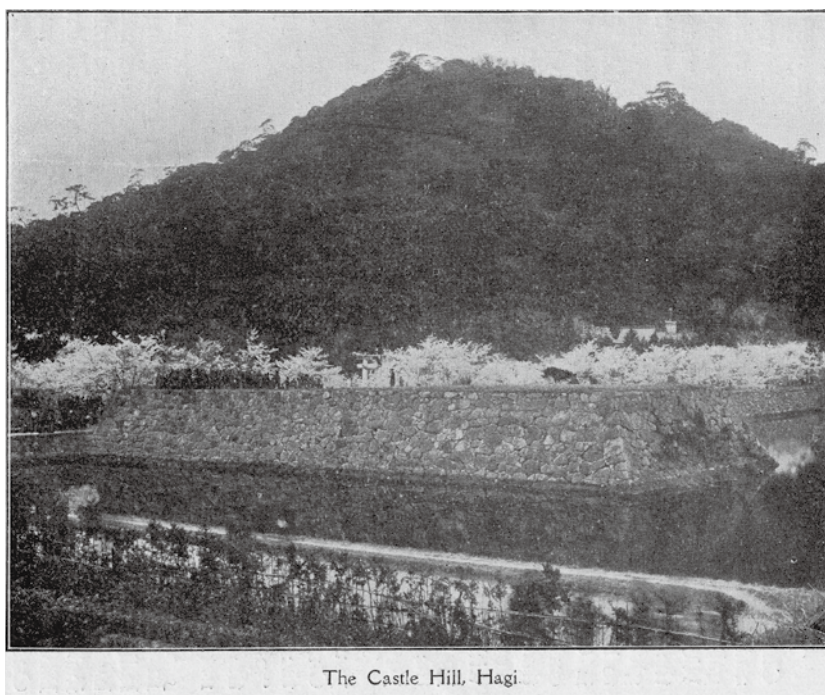
M. E. ショペン

山口県は、はるか昔から、強力な勢力を誇る長州一族の領国であった。彼らの城は萩にあり、その城跡は海岸近くの高い丘陵の上に今も望むことができる。この一族は、この国の政治的な出来事において、重要な軍事的役割を果たしてきた。

本県において、最も重要な歴史的出来事の一つといえば、壇ノ浦に程近い関門海峡での戦いである。そこでは、平家と源氏という、強力な一族によって争われ、前者が後者によって滅ぼされた。平家一族の権力を奪い取ろうと何度となく試みたのである。この海峡では、どういう訳か、苦悶の表情をした人の顔のような甲羅をもつ大きな蟹の一種が獲れるが、この戦の際に海に溺れ沈んだ平家の兵士たちが乗り移ったのだと信じられている。

封建時代の領主によって争われた場所は、ほとんどない。50年前のことになるが、山口と萩とを結ぶ道の途中で、激しい争いが起こった（大田絵堂の戦いのことか）。勝者側の兵士であった男は、今はキリスト教徒の牧師をしているのだけれど、戦いがどのようなものかについて語ったことには、敗れた敵軍の兵士の生きた肝臓を切り出して食べたと言う。肝臓には勇気が宿ると信じられていたからである。

神功皇后が朝鮮征伐に出発したのは、長府からであった。彼女の栄誉を讃えて建てられた神社（忌宮神社のこと）は、この街の中央で見ることができる。そこから見える二つの島は、彼女が落とした宝石からできていると言われている。



The Castle Hill, Hagi.

萩城跡

現代になって、米国・英国・仏国の連合軍によって下関が砲撃されるという歴史的出来事もあった。この国が身につけなくてはならない力の強さについて、現政府に気づかせたという点において重要な意味を持つ。

いくつかの歴史的出来事は、山口町（現在の山口市）に関するものである。16世紀に、かの有名なキリスト教宣教師のフランシスコ＝サビエルが数年間ここで暮らし、説教を行ったのである。

その頃、何十万というキリスト教徒が全国に散らばっていて、山口はその信仰の中心地となった。しかし、恐ろしく、容赦のない迫害によって、彼らは次第に踏み潰されてしまった。

現在の天皇（明治天皇のこと）が1868年に王政復古を成し遂げる少し前、将軍に反対する運動をしていた指導者の何人かが山口に集まり、その会合

から間もなくして、幕府の権力がひっくり返された。

日本の偉大さに貢献した多くの人物がこの県から輩出された。彼らのなかには、東荷村（現在の光市）出身の伊藤博文公爵や、桂太郎公爵、徳山出身の児玉源太郎陸軍大将、山縣有朋元帥の名を挙げることができる。

あまり重要性はないけれど、日本と外国勢力とを結ぶ関係に相当な影響を与えたかも知れない、その他二つの出来事がある。かの名高い中国の政治家である李鴻章や、現ロシア皇帝の命を狙った企てである。これら二つの出来事は、下関で起きて、当時は大騒ぎを引き起こしたのである。

かつては戦争に時を費やしていた一族（毛利家のこと）は、今や山口県の実業や商業的企業を牽引する指導者の一つとなっている。

コラム 本書のロゴデザインについて

「ヤマグチ紳士録」（本書10頁）で紹介されるように、多彩な才能と趣味をもつガントレットは、英習字や装飾文字の意匠も得意とした。

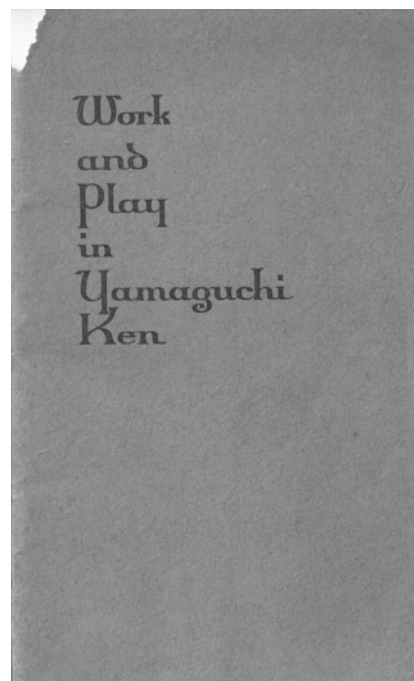
1908年（明治41）4月9日に大正天皇（当時は皇太子）が山口高商を行啓された際には、拝謁の榮譽に預かるとともに、「More Music」（和題は「天楽」と題した格調高い英文詩を装飾文字にして献上している〔山口高商1940〕。

『Work and Play in Yamaguchi Ken』の表紙ロゴデザインも、現存するガントレットの装飾文字と酷似するため、彼をおいて他に考えられない。今回の日本語訳本の刊行にあたってはトレースのうえ再録した。現代の目で見ても、洗練されたデザインである。

（北島）

【参考文献】

山口高等商業学校 1940 『山口高等商業学校沿革史』



『Work and Play in Yamaguchi Ken』の表紙

愉快的気持ち

—日本式英語を読む—

(原題：In Lighter Vein Jappanned English)

G. E. ガントレット

教師の仕事は、単調だとよく言われる。私は、いわゆる仕事そのものを単調仕事だと思ったことはない。それに加えて、疲れた教師の身に、数多くの些細なことが起こるものである。次に指し示すように、悪意のない学生たちが書いてくれた作文には感謝したくなる時がある。我々はまた、それらのなかに興味をそそられることがある。

無意識のうちに生じた冗談に私が最初に出会ったのは、東京に所在する、とある教会の管理人に、部屋に火を灯すように言おうとして、部屋に火を着けると伝えていたことである。

次のようなことがあったと思い巡らせてみてほしい。

鉄道事故に関する作文。

「夜空は晴れ渡っていた。虫の声が聞こえ、その上では、平穩のなかで月が輝いていた。しかし、その下では、『ああ』とか『おお』と言った声がひっきりなしに聞こえた。そして、死にかけた多くの人々によって地面が覆い尽くされていた」

次は、既婚者の女性に贈った手紙。

「Xさんへ。あなたが昨日買い求めたランプをお送りしました。どうか早くお金をお支払いください。敬愛の意を込めて」(「lamp」には性的意味が含まれる)

シェークスピアが書いた戯作には、多くの罵り言葉(oaths)が出てくるのだけど、試験で「oathの意味を説明せよ」と出題したところ、次のよう

な答えがあった。

「誓い(oaths)とは、その実現(fulfillment)に向けて、全能の神(Almighty)にする誓い(swore)や信頼の表現である。我が剣(sword)にかけて」(oathには「罵り言葉」(畜生呼ばわり)の意味があり、Almightyにも「何てこった！(こん畜生)」の意味がある)

次のような記述を読んだ後、あなたは火山に登りたいとは思わないかもしれない。

「火山の周りに住む人々は、前もって他所の地域に移住する必要がある。もしかしたら、読者は、昨年に大災害を引き起こした磐梯山の噴火に気に留めておられるかもしれない。禿げ山となっていて、そこには一本の木や低木も生えていない。硫黄や火山灰が混じった焼けた砂で覆われている。時折、それらは自ら破裂を起こすことがある」

スイッチバック式(switchback：急な丘陵斜面を登るための葛折線路)の鉄道の話で締めくくろう。「スイッチバック式(switchbuck：綴り違い)の鉄道は、一人のアメリカ人(a american：正しくはan American)によって発明された。上から下へと行こうとする力を利用して坂を登る。それゆえ、山間部で使うのが適切である。この事実は、物理学(phisic：正しくはphysic)の進歩(progres：正しくはprogress)にとって喜ばしい(joifull：正しくはjoyfull)」。

我が病床生活

(原題: My Lay)

M. E. ショペン

覚書 — ショペンは、不幸にも橋から川に転落して足の骨を折った。彼は、次のような美しい韻文として、その出来事をまとめ上げた。赤川病院の天井を見つめながら、一編の詩にまとめたのである。その哀愁は、きっと全ての者の心を打たずにはいられまい。

— 編者 (サンダースのこと)

山口町でのことだった。
心地よい五月のこと。
自転車を漕いでいた私。
橋を乗り越え、落下した。
それから始まる病床生活。
私を見たのは車屋で。
助けもしない我が惨状。
いずこへと去ってしまった彼ら。
落ちた私は、身動きできぬ。
まず乗せられたのは担架の上。
今いるのはベッドの上。
そして私が過ごすは五月の日々。
あまりにゆっくり流れる時間。
送られ来たのは病院で。
英語で言えばホスピタル。
ここに訪ねて来るのは我が友人。
去っていくのもまた彼ら。
しかし、何処行くあてもない私。

看護婦の名はおキクさん。
言いかえるのなら、ミス クリサンセマム
(Miss Chrysanthemum)。
アメリカ人じゃないけれど、至って元気。
我が銃にかけて！
薄い紙でできてる扉。
全ての壁が扉ばかり。
日中に聞こえて来るのは知らぬ音。
夜に聞こえて来るのは鼾の音。
我が視界のうちに書が掛けてある。
伊藤公爵が書いたのさ。
そこにはこう記してある。
「国の光を通して見よ」と。
光を灯すと、見える星々。
誰の身にも降りかかる災難。
許しを乞うつもりは全くない。
けれども、何だって良いのさ。
骨折した私の足を取り替えてくれ！

私の隣人

(原題: My Neighbor)

J. E. モンクリフ

編集者は、私に冒険をしろとおっしゃる。しかし、そんなことを命令するなんて、ありえない。確かに、私は冒険をしようと、最善を尽くした。かつて私は二晩と一日をかけて、火山の噴火口のなかで過ごしたのである。そして、最初の夜は、苦痛なことに、寒さのあまり凍ってしまうところだった。

私はまた、自らの原付自転車にまたがり、雪や、ぬかるみ、雨のなかを抜けて、我らが山道を通過した。滑り落ちたり、何かに突っ込んだりすることなしに。だから、今後事故があったとしても、全くもって私の落ち度であるとは思わないのである。

萩に住む私以外の外国人といえば、私の隣人であるビリオン神父である。フランス人のカソリック系牧師である彼は、自然と注目に値する人柄で、どのような環境にあっても目覚ましい人物であるに違いない。

およそ 47 年前に日本へとやって来て、この国が中世的な状態から今日あるような状態へと移り変わるのを目の当たりにした。最初の頃は、「邪悪な教義」(キリスト教のこと)を広めようと精力的に活動したために、投獄されたこともある。当時は、法律で禁じられた宗教であったのである。

彼の経歴は、ロマンスというよりは、冒険多きものであった。しかし、いかなる困難に突き進もうとも、微笑みを続けることを決心させたのである。今や、彼は 70 歳となっていて、これ以上愛想良くニコニコとして、楽しげな老紳士は、どこを探しても見い出すことはできないだろう。

彼は、自らの責務を果たすため、馬の背に乗ってずっと旅している。昨年、軍の将校から新たな一頭を買い求めた。しかし、彼のような年齢の人間には元気が良すぎて、もう一頭の別な馬と交換したのだけれど、その馬が脇腹を怪我していること

に気が付かなかった。

ある日、鞍を取り付ける腹帯を彼が締め上げると、その馬は痛さのあまり頭を振り回して、主人の左耳の半分を食いちぎってしまった。それから二、三日後には、馬が神父を振り落としたけれど、骨は全く折れていなかった。彼のような人間にとっては、深刻な事態であり、二、三ヶ月の間、ベッドに臥せっていなければならなかった。しかし、杖をつけるようになった彼は、すぐさま自らの仕事に戻ったのである。そして、人生で大切なことは、些細なことには気にしないことだと言った。

ビリオン神父は大変な学者であられる。日本語や中国語の双方に優れ、仏教の教義を理解し、仏教の学院では、宗教学的な正規課程を担当したこともある。彼はまた、日本における初期のキリスト教殉教者に関する著作や、仏教に関する著作などを日本語やフランス語で執筆したこともある。ほとんど知られていない仏教の経典を中国語からフランス語に翻訳したこともこれに含む。

彼に関する興味深い逸話の一つに、1904 年 5 月 27 日の「昼寝」からいかに目が覚めたかというものがある。彼を起こしたのは、日本海における海軍大将の東郷がロシア海軍大将ロジェストヴェンスキー率いる駆逐艦を撃破する「爆弾」が破裂する音であった。その戦闘におけるキャノン砲の射撃音は、百マイル離れた萩でも聞くことができ、窓をガタガタと揺らしさえた。

彼の経験に関するもう一つの逸話としては、1872 年に起きたひどい大地震と津波(浜田沖地震のこと)に関することがある。

彼は、まことにもって楽しい御老人であって、彼が自らの一生を過ごす特権は、六人分もの個人的な冒険に値する。

コラム 萩中学校時代のモンクリフ

当時、鉄道から 30 マイルも離れた萩は、陸の孤島であった。そんな萩に、ちょっとした革命が起きた。自動車の乗合バスが運行を開始したのである。萩在住の米国人モンクリフは素直には喜ばない。自らが所有する原付自転車で萩と山口間を何十回も往復した経験から、道中の険しさを熟知していたからである。彼の用心は、すぐさま正しいことが証明された。それから十日ほど後のこと、バスが丘陵を降りていく途中、ある荷車を避けようとして急に向きを変えた際、道際の土手に乗り上げ、身動きが取れなくなった。その運転手と五人の乗客が危うく死ぬところだった。結局、そのサービスは数ヶ月間延期されることになった。

モンクリフは萩中学校で英語を教えていた。英文を読む授業で使った教材は『フィリップ＝シドニー卿の死』("The death of Sir Philip Sidney") であった。1782 年に英国人作家ジョージ＝カーターが執筆した歴史物語で、英国の軍人で宮廷詩人としても知られたシドニー卿の、オランダ遠征中の勇猛な死を描く。古風な文章だが、生徒たちは、それを熱心に吸収しようとした。英雄主義のような内容が彼らの心に訴えかけたのである。

生徒や住民たちと良好な関係を築こうと努めたモンクリフにとって、事態を悪化させる出来事があった。米国のカリフォルニアで、日系移民への排斥問題が激化したのである。こうした社会問題が一因となって、モンクリフが学校内外で活動するのを妨害する者たちが現れた。

そのような折、生徒のうちの一人の兄弟が亡くなったので、モンクリフは、親切心に満ちたお悔やみの言葉をその家族に送った。しかし、その後、遺族らは慎重に彼を避けたのだった。

ところが、ある時、その家族の父がモンクリフに宛てて、彼の伝言に答えるための贈り物を送ってよこした。しかし、それは人目を避けるように、こっそりと裏口に送られてきたのである。その生徒は、目に涙を浮かべながら、モンクリフにこう告げた。

「私の父は、あなたの親切心に痛く感銘を受けました。しかし、我々があなたと友人になることはできません。我が国と貴国との間で戦争がいつ起こるかも知れず、その時はあなたがきっと我らの敵となるでしょうから」

以上は、トマス H. サンダースの単著『My Japanese Year』[Sanders1915] 第 11 章「萩を訪ねて」の一コマである。渦中のモンクリフを励ますためか、サンダースは何度も萩を旅して、ビリオン神父とも会っている。開国間もない頃から日本に滞在するビリオンは、迫害や傷病・自然災害など、幾多の試練を乗り越えてきた。若きモンクリフやサンダースらにとっては、神父の存在が心の支えとなったのである。結局、モンクリフは任期を終えて萩を離れることとなり、サンダースやガントレットのいる山口高商へと移籍する。大正初期の山口において、こうした人々のやりとりがあったことを忘れてはならない。(北島)

【参考文献】

Thomas H. Sanders 1915 "My Japanese Year" Mills & Boon, Ltd., UK.

一つの質問

(原題：One Question)

K. S. ビーム

中学校の教員として私たちが働く際に最も重要で困難な責務の一つとして、日本人の英語教師たちの問いかけに答えることがある。彼らが主に知りがっていることと言えば、慣用語句の意味や、口語的な言い回しである。その問いに対して、一度に全てを答えることが難しいと思うことが頻繁にある。

1911年12月1日のことである。学校での仕事を終えた私は、山口で開かれる感謝祭の夕食に出席

するために、駅に向かって学校の歩道を急ぎ足で歩いていた。教員の一人が私を呼び止めて、次のような単純な質問をしてきたのだった。

「来年の冬の昨日といたら、どう言えばいいんでしょうか？」

!! — ?? — !!!***?? — !!!

ついに私は次の列車に乗る羽目になった。

めしつか 召使いの災難

(原題：Troubles of a Servant)

T. H. サンドース

私が来日して二、三ヶ月後のことである。私が椅子に座っていると、召使いの金子が来て、長いこと私に話をした。当時、友人のビーカーやディットマー、モンクリフたちがそこにいた。

金子はそのことについて述べようとしたのだけれど、明らかにはっきりとは言わず、多くの身振り手振りを使って説明したのだった。我々は、誰一人として日本語が分からなかったのので、彼が何を言おうとしているのかを言い当てようとした。あらゆる証拠をもとに熟考をめぐらせ、彼の奥さんが赤子を連れて現れたと言おうとしているのだと判断した。

したがって、我々は皆嬉しそうな顔をして、拍手をし、彼の背中をポンポンと叩いたのである。そして、その場に相応しい喜びの表現をしてあげた。彼は、怒りというよりも悲しそうな顔つきとなったので、我々は思いもかけず、いささか驚いたのである。

数日後、日本語を話すことのできる誰かがやって来て言うことには、金子は台所のコンロがうまくこと作動せず、煙が出て、彼の上に灰が降りかかって来たのだと言おうとしていたのだとのことだった！

別な料理（人）の話 (原題：Another Cook (-ed?) Story)

C. G. デットマー

新しい料理人は、必要な時に限って災難を引き起こしてくれる。いつだって予期しないことが起こるのである。まさにそんな時に限って、失敗をする才能を持っているように思える。

ある日、私に一人の客人が訪ねて来た。それはサンダースだった。だから私はあまり気にかけなかった。夕食用に、いくつかの林檎^{りんご}を煮込む（stew）よう命じ、彼女はその作り方を知っていると行って私を安心させた。そして、夕食がやって来た。林檎とともに、見慣れぬ料理が我々を出迎えた。彼はそれを見て、私もそれを見た。一体何なのだ、これは？

どちらも答えることができなかった。ひょっとしたら、我々をもてなすために、彼女が日本料理を作ったのかもしれない。私たちは味わってみた。何という組み合わせだろう！ 人参、ほうれん草、玉ねぎ、じゃが芋、そして林檎。これこそが彼女が考えた林檎の煮込み^{にこ}（stewed apple）であった。彼女は、野菜のシチューを作ろうとして、肉の代わりに林檎を使ったのである。そう、確かに彼女は作り方を知っていた！ 少なくとも彼女は、本来の作り方だと信じこんでいたのである。

コラム 御雇い外国人と召使い

御雇い外国人には、身の回りの世話をさせるために召使いを雇うことが多かった。サンダースの著書『My Japanese Year』[前出]にも召使いにまつわるエピソードが紹介される。

日本語のわかる同僚日本人を介して、召使いが付けている家計簿を英訳していた時のこと。購入物品の欄^{らん}に「ハチミツ」と記されていたので、知人は「bee's honey」と読み上げ、サンダースはこれを書き留めた。しかし、サンダースは蜂蜜^{はちみつ}を口にした覚えがない。何度かこの品目が出てくるのを訝しく思ったサンダースは、召使いを呼び出して問い糺した。彼は、まだそれが家にあると言う。実物を見せるように伝えたと、彼が持ってきたのは「鉢三つ^{はちみつ}」であった！

また、次のようなエピソードもある。

外出しようとしたある修道女は、召使いに人力車を呼ぶように伝えた。急いでいたので、「早く（hayaku）、早く」と伝えたつもりが、慣れない日本語であったため、「百（hyaku）、百」のように相手に聞こえてしまった。驚いた表情で問い糺す召使いに耳を貸さず、修道女は苛立った様子で、「そうよ、そうよ」と言って、また同じ発音^{ただ}で催促^{さいそく}をした。間もなくして、家を出ようとした修道女は、何十台もの人力車が玄関前に次々と到着するのを目にして震え上がった。再び家の中へ戻り、その場にへたり込んで泣いたという。

（北島）

山口高等商業学校

(原題：The Yamaguchi Higher Commercial School)

G. E. ガントレット

この学校は、かつては現在と大きく異なっていて、150 年前に創立され、この街ではおそらく最も古い。その組織や目的は、何度となく変わってきた。1859 年、山口県の封建的領主であった毛利侯 (Lord Mori) が管理するところとなり、その発展を推進するにあたって多大なる熱量でもって、学校の面倒を見たのである。彼は二つの単科大学を設立した。その一つは、武芸を教えるものであり、もう一つは文芸や古典を教えるものであった。当時はまだ古い政体 (徳川幕府のこと) の下にあったことから分かるように、その軍事的な作戦といったら刀や弓によるものであったし、その古典は、とても古ったらしい中国の哲学的な文学であった。

そこで育った生徒たちは、王政復古を成し遂げる偉大な力に加わったと言って良いかもしれない。王政復古の草案者たちが最初に密議の場を持った家 (枕流亭をさすとみられる。元は道場門前の旧安部家の離れであった) は香山公園の敷地内で見ることができる。

1871 年には、封建制度が廃止され、現代的な教育が始まった。その中には、文学や数学、外国語などが含まれていた。その頃は、学校を運営するために、公的基金があてがわれた。毛利家によって、その後も長い間活発な支援が続いたのだけれど。1885 年には、県内にあるこの学校や他の学校を支援するため、毛利侯の主導のもと、合計で三十万円もの資金が集まったのである。

1887 年には、高等学校となる。この時から、東京の文部省によって運営されている。現在のよう、高等商業学校として機能するようになったのは 1906 年のことである。最初は、松本源太郎校長 (福井県生まれの教育者で、晩年は学習院教授

や宮中顧問官を務めた) の指導力のもとにあったが、1909 年には坪野平太郎 (石川県出身の政治家・教育者。二代目神戸市長として辣腕を振るった後、山口高商に赴任した) が校長となる。

学校の繁栄に向けて坪野がみせた不屈の情熱は、この記事を書くにあたって言及を省くわけにはいかない。彼は、自らの体調が優れないにも関わらず、世界の中で卓越することを怠らなかつた。何よりも、彼は全ての反対に直面しても、自らの考えを率直に話すのを恐れない人だった。今日では、こうした性格は、めっきり少なくなってしまった。坪野が東京商業高等学校の校長を務めるため学校を離れるにあたり、現在の横地石太郎 (石川県出身の教育者。横地については次頁のコラム参照) が校長となるよう、後継指名したのであった。

現在の教育科目は、次のような構成である。道徳、書道、商業通信、商業科学、商業実習、英語、朝鮮語、中国語、ドイツ語、商業数学、商業地理、歴史、簿記、応用化学、商品学、経済、法学、体育など。そして、毎年春になると、生徒たちは周遊旅行に出かける。三年生は中国・朝鮮・満州、二年生は東京やその周辺、一年生は大阪と神戸である。

学校には 320 人の生徒たちがいる。躊躇わずに言えることとしては、この地方では、誰もが同じような才能を持っていて、学級生活においては礼儀正しく、秩序立っている。何にしても、教師の手を煩わせることがない。総じて、彼らは皆、善良な性格である。勉強中であろうと、遊んでいる時であろうと、何につけても引き受け、上手に誠実にこなしてくれる。もし、日本の生徒たちについて、何か難点を挙げろと言われたのなら、些細な物事における責任感や、主体性が決定的に

欠如していることを指摘しておきたい。

山口中学校の分校として約三十年前から始まった萩や長府、岩国、徳山の中学校について記すのも興味深いことである。我が友人のモンクリフ、ディットマー、ビーム、そしてショペンはこのことを知らないようである。少なくとも彼らからは、彼ら自身が在籍する学校の親にあたる私たちの学校

への敬愛の念を感じ取ることはできない。

この学校の紹介を終える前に言っておきたいこととしては、^{かしこ}畏くもあらせられる天皇陛下（明治天皇のこと）および皇太子殿下（後の大正天皇のこと。本書 21 頁コラム参照）に^{ごらいりん}御来臨いただく^{えいよ あず}荣誉に預かったことである。

コラム 校長・^{よこじいしたろう}横地石太郎について

山口に赴任する前の横地は、愛媛の松山中学校で教頭・校長を務めた。^{そうせき となり}夏目漱石とは隣の席で、伊予灘で舟釣を楽しむ間柄であったことから、小説『坊ちやん』[夏目 1907] の赤シャツのモデルとされる。ただし、^{けんぼうじゅつすう た}権謀術数に長け、^{いんけん}陰險な赤シャツとは対照的に、実際の横地はきわめて^{こうれんけつぱく}高廉潔白人柄で、和・洋・漢籍に通じた教養深き教育者であった。福島県尋常中学校で校長を務めた際、ストライキを起こした学生を^{かば}庇い、自らの職を^じ辞したこともある。

横地は、『坊ちやん』の発表に当惑したらしい。坊ちゃんのモデルとされる弘中又一とあい語らって、同作品所収の^{うずらかご}『鶉籠』を買い求め、小説の虚実に関する詳細な書込みを行った。現在、この横地・弘中の書込み本が漱石研究の重要資料となっている[新垣 1982]。

山口高商時代の横地は、東アジアで活躍できる若き経済人の育成だけでなく、山口県の地域課題の解決にも積極的に取り組んだ。御雇い外国人たちの景勝地探索もまた、このような観点から再評価をする必要がある。

（北島）



幼子を抱く横地石太郎 [Sanders1915]

【参考文献】

夏目漱石 1907 「坊ちやん」『鶉籠』 1～196 頁、春陽堂、東京。

新垣宏一 1982 「横地・弘中書き入れ本『坊ちやん』について」『四国女子大学研究紀要』Vol.2、1～102 頁、四国女子大学、愛媛。

Thomas H. Sanders 1915 “My Japanese Year” Mills & Boon, Ltd., UK.

日本の宗教 (原題：Japanese Religions)

T. H. サンダース

初めて日本に来た時、どのような種類の社交集団とここで出会うのか、全くもって知らなかった。集団というものがあるのかどうかさえ、知らなかったのである。

そして、ここに来てからというもの、私を非常に驚かせたことの一つが、宣教師たちの群れに呑み込まれてしまったことである。それは徐々に進行的なことであるけれど、私の意思に反してそれを許したという訳でもなければ、また、どのようなことが起きるのか考えが及ばなかった訳でもない。ここにいる教師たちの多くは、Y. M. C. A. (キリスト教青年会) を通じて契約をしていて、そのために、彼らは聖書の教室を開き、またある者は布教活動を自ら組織していたのである。しかし、私にはそのような義務が全くない。

私が告白せねばならないのは、宣教師ではない日本在住外国人のかなり多くは、宣教師やその活動に反対しているわけではない。特に商業に関する授業では、非常に過激で、彼らが言うことの一つには、日本人たちは、キリスト教と同じくらい素晴らしい自らの宗教を持っていたが、他の宗教を強要されることがとても耐え切れないというものである(サンダースの同僚ガントレットは、信心深いキリスト教徒で、自給伝道隊の一員として来日した。授業中にも布教に資する講話を行なうことがあり、時に周囲の不興を買うこともあった)。

私は、ここで抽象的な比較論を展開するつもりはない。私自身が目にした、一、二のことについて語りたいのである。ここ山口では、日本の宗教は「キリスト教徒と同じくらい素晴らしい」と言われていることについてである。読者は、自らの結論を導き出していただければ、それでよい。

日本の宗教の主要なものは、先祖崇拜である神道と、仏教である。想像するに、後者は、非常に難解な哲学で、ほとんどの人が理解することできず、私もまた理解者の一人ではない。

私がここで述べたいのは、宗教の概要ではなく、彼らの行いについてである。彼らが信仰を捧げる神社の周りを歩き回りたくなった時には、どんな日でも見るこのできる光景である。

あらかじめ決めた時間に崇拜するために、宗教的な集会へ人々が集うのではない。彼らが「行きたい気になった」時に参拝し、神社の前に立つ。自らが到着したことを知らせるために手を叩き、神の気を惹く。それまで、神は眠りにについている。そして、参拝者は、自らの願いをぶつぶつと呟きながら、何度も御辞儀をし、畏敬の念を示す。

写真に掲げたように、ここから道を少し上ったところにある寺院(山口大神宮のこと)では、いくつかの奇妙な行為が近頃あった。それはお祭りであって、夜になって全域に明かりが灯された。丘陵側の木々の中であって、絵に描いたように美しい光景であった。日本人たちが大勢そこを訪れ、ありとあらゆる奇妙な謀り事をする。彼らは、お菓子やその他の商品などを捧げ物として持ってきて、それらを祭壇の前に置き、手を叩いて、神の気を惹こうとする。石でできた水槽には、聖なる水が入っていて、それを飲んだり、頭に塗りつけたりする。

また、庭には、石で作られた狐を目にするかもしれない。彼らにとって、狐は神々の一つである。人々は病を取り除くため、狐の頭を撫でたり、狐の鼻先に自らの額を押し当てたりする。彼らのなかには、あらゆる種類の感染症に苦しむ者もあり、病気を広

めるには、特に効果的な方法のように思える。

しかし、最も奇妙なことは、神社のなかでは、神官はしゃがんだ姿勢をして、神社の中だけで着る日本式の衣装に身を包み、モップ（御幣のこと）のようなものを傍（かたわら）に置く。それは、長い紙でできた飾りが竹の竿（さお）の上に取り付けてある。人々が社内に入ってくると、彼らの頭の前でそれを突き出す。そして、そのモップを使って、人々の頭（れい）まわりをパタパタと軽く打ち付け、邪悪な霊（れい）を追い払う。

多くの場合、鳥居（とりい）と呼ばれる石でできたアーチが建てられている。その天辺（てんぺん）に向かって人々は石を投げ上げる。もし、石が天辺の上に残ったのなら、あなたの罪（つみ）は七年間許される。写真に写っているような鳥居には、こうした石が乗っているかもしれない。もしかしたら、こうした鳥居がいくつも連続して建てられていることもある。そのなかを歩いているうちに、自らの罪惡（つみ）が許されるようになるのである。

祈るには、さまざまなやり方がある。ある寺院

では、自らの願いを紙に記し、入れ物のなかに投げ入れる。他のやり方としては、紙に書いたものを、口の中で嚙（か）んで、汁気の多いドロドロしたものにして、神社の扉（とびら）に向かって投げつける。もし、それが扉にくっついたのなら、あなたの願い（かな）は叶う。もし、くっつかなければ、別な願い事を嚙（か）んで、再び投げつけなければならない。

仏教徒たちは、死んだ子供（こども）たちが、あの世で石を積み上げて自らの罪（つぐな）を償わなくてはならないと信じている。そして、時折、仏教の墓地では、女性が泣きながら熱心に石を積み上げている姿を目にするかもしれない。それは、子供を亡くした母親であり、そうすることで、先立（さきだ）った子供の苦勞（くろう）を少しでも軽くしようとしているのである。

この種の迷信に反対を決め込む前に、多くのことを考える必要はないように私には思える。もちろん、宣教師たちや Y. M. C. A. の人々がキリスト教の教えを広めるする姿を私自身が公然と連想してしまうのは、これが唯一の理由ではない。



The Daijingu Shrine, Yamaguchi.

山口大神宮

訳者解題

ーガントレットとサンダースー

北島 大輔

(1) エドワード L. ガントレット

今から 10 数年も前のことである。山口市内で遺跡発掘をしている私に、自転車で通りかかった年配の男性が声をかけてきた。かつて写真館^{いとな}を営んでいた自宅の一室を改装したアトリエで、古い写真を飾っているから、見に来ないかとのこと。

早速、昼休みに拝見させていただくと、一枚の写真に目が止まった。あきらかに日本人とは異なる顔立ちの小柄な人物を取り囲むように、数人の人々が写真に収まっている。

私に声がけした主人がまだ生まれる前、写真館の一室で撮影されたものである。写っているのは、山口高等商業学校(現在の山口大学経済学部の前身。以下「山口高商」)の講師であったガントレットとその子供たち、主人の御両親や兄弟たちとのこと。家族ぐるみの交流があったらしい。すでに東京に転居していたガントレットだが、何かの折に山口へ立ち寄り、再会の記念撮影になったとみられる。

ガントレットのことを調べ始めると、これがなかなか面白い。

1890 年(明治 23)に来日すると、自らの資金と工学的技術をもとに東京本郷中央会堂(現在の本郷中央教会。東大本郷キャンパスに隣接)にカナダ製大型パイプオルガンを設置。これが音楽史上、日本最初の設置例とされる(残念ながら関東大震災で焼失)。こうした貢献もあり、同教会の初代オルガニスト・聖歌隊長に就任した[赤井 1995]。

後に『東京行進曲』^{うた}を唄う佐藤千代子に音楽指導を行なったほか、『荒城の月』の瀧廉太郎^{たきれんたろう}もまたガントレットのパイプオルガンを奏^{かな}でたという。さらに、宮沢賢治の詩集『春と修羅』^{しゅら}第二章[宮沢 1986]の「告別」にパイプオルガンが登場するのも、同会堂での見聞にインスピレーションを

得たとされる(賢治は、八か月ほど本郷区菊坂に下宿し、東大赤門前の印刷所「文信社」で働いていた[宮沢 1987]。本郷中央会堂とはわずか数百 m の距離にある)。

ガントレットの結婚相手は、山田恒^{つね}という[ガントレット 1949]。避暑地の軽井沢で運命的な出会いを果たし、法律に基づく英国人と日本人との国際結婚第一号とされる(当時、日本人女性が外国人と結婚する民法上の規定がなかったため、日本国内から失^{しつそう}踪したということにして恒の日本国籍を抜^{けいりゆうちゆう}き、繋留中の英国船上で発見されたということで英国王室から英国籍取得と結婚許可の証書を得る)。

恒は、ガントレットと出会う前から敬虔なキリスト教徒で、女性の地位向上や弱者救済に尽力した社会運動家であった。戦前の日本にあって、欧米各国との国際親善に努め、日本基督教婦人矯風会^{きりすときょう}会頭や日本婦人団体連盟会長を務めた。彼女はまた洋裁を得意とし、西洋のエプロンを日本の婦人向けに改良した「割烹着^{かつぼうぎ}」を創案した人物としても知られる。

恒には、弟がいた。名を耕作という。後に「赤とんぼ」「まちぼうけ」など数々の名曲を生み出す、あの山田耕筰(本名は「耕作」。音楽家としては「筰」を用いる)である。当時、不良少年だった若き耕作に西洋音楽の手解きをしたのは義兄^{ぎけい}のガントレットである。かつて旧制第六高等学校(新制岡山大学の前身)の講師として岡山に赴任していたガントレットは、東京から呼び寄せた耕作と共に、仮寓^{かぐう}先の三友寺の離れでピンポンを楽しんでいた[山田 1950]。これが日本国内で行われた卓球の初例とされる(卓球をした最初の日本人としては、渡英留学中の夏目漱石がわずかに先行する)。後に山口高商の校歌作曲を山田耕筰が手がけたのも、ガントレット抜きには語れない。

ガントレットはまた、英国の速記術を日本語向けに改良したガントレット式速記術を開発し、大日本帝国議会での議事作成に採用された。皇居に招かれ、明治天皇の御前で幻燈会げんとうかいを開いたこともある。英習字や装飾文字の才能があり、日本銀行が発行する紙幣の英文字をデザインしたり、装飾文字の英文詩を大正天皇に献上したりもした。

山口へ赴任してからは、後に秋芳洞や長門峡あきよしどう ちようもんきやうと呼ばれる景勝地を精力的に探索し、観光資源としての価値や魅力を国内外に発信した〔山口県1954ほか〕。本書（15頁）に収録したガントレットの随想「洞窟のある地域」は、秋芳洞たきのあなの滝穴など、秋吉地域の洞窟探検の記録である。

従来、ガントレットの秋芳洞探検については、防長教育会での講演録や、英国の学術雑誌への報文などが知られていた。しかし、本書で収録した随想「洞窟のある地域」は、秋吉台科学博物館『秋芳洞の研究史―秋芳洞の文献目録―〕〔1995・2002〕に記載がなく、しかも開洞間もない写真を2点掲載する点で、きわめて貴重である。

戦後、年老いたガントレットは、日本外務省の通訳として、主権回復交渉や、若き外交官の語学指導に従事した。米国進駐軍（GHQ）に勤めた長男のオーエンと共に、秋吉台が米軍の爆撃演習場となる計画に反対の立場をとり、これを阻止した。

今、山口の豊かで美しい自然景観をこうして楽しむことができるのは、ガントレットたちのお陰といっても過言ではない。

以上のようなエピソードの秀逸さもあって、私はすっかりガントレットの虜とりこになった。そして、何の偶然からか、弥生時代の四隅突出型墳丘墓の研究で知られる渡邊貞幸先生（島根大学名誉教授・日本考古学）との会食中にそのことをお話した。

すると、驚いた様子で渡邊先生がおっしゃるには、太平洋戦争の爪痕つめあとがまだ残る小学生時代、東京新宿区の自宅近くにあった教会の敷地内でガントレットという老紳士から英語の手解きてほどを受けた記憶があるとのこと。ガントレットが体調を崩して教室を閉じるまでの、限られた期間のことであった。

後日、上京した渡邊先生は、幼い頃の記憶を辿って現地を再訪され、そこが日本基督教婦人矯風会の本部であり、かつて敷地の一角にエドワード

L. ガントレットの自宅があったことを確認された。夫人の恒を見かけた記憶がないのは、1953年（昭和28）に彼女が他界した後に学び始めたためとみられる。

87年間という長い生涯のなかで、多くの人材を育てたガントレットだが、渡邊先生こそが最後の教え子だったのである〔渡邊2016〕。

（2）トマス H. サンダース

そして今、私が夢中になって調べているのが、山口高商時代のガントレットの同僚であった若き秀才英国人のトマス H. サンダースである。

彼の経歴については、本書序文（1頁）や、ディットマーによる人物評（14頁）を参照されたい。数々の逸話や評伝のあるガントレットに比べ、サンダースの名は日本国内ではほとんど知られていない。

彼のことを私が初めて知ったのは、長門峡の観光開発史を調べていた時のことである。防長新聞主筆しゅひつの原田豊次郎（紀堂）が行った講演録『長門峡に就て』〔原田1923〕のなかで、サンダースの名が紹介され、『My Japanese Year』という著書で長門峡の溪谷美を絶賛しているという。

この本をぜひ読んでみたいと思い、山口高商の後身である山口大学の経済学部東亜経済研究所や総合図書館に照会してみた。そうしたところ、山口高商時代の図書カードに登録が確認できるものの、現在は原本を確認できないとのことであった。

ただ、国内の図書館では、山口県立山口図書館で唯一配架が確認できること、米国のインターネットアーカイブ上でデジタルデータが公開されているとの有益な情報をいただくことができた。

その後、東京の古書店で同書が売りに出ていることを知り、幸運にも買い求めることができた。

はやる気持ちで本をめくると、表紙見返しには、刊行もない1915年（大正4）11月6日に、山口高商三代目校長の横地石太郎よこじいしhtarouに宛てたサンダースの自筆サインがあった（横地校長については、本書29頁のコラムを参照）。本文の各所に横地が書込んだメモがあるほか、口絵写真にも幼子おきなご（孫か）を抱く和服姿の横地が写っている。本書と巡り逢えた喜びに、心が打ち震えた。

乏しい語学力のなか、英和辞書を片手に少しずつ同書を読み進めると、そこには山口の自然や

歴史・文化に関するさまざまな記述に^{あふ}溢れている。日本人では当たり前のこととして、書き留めないような日常生活についても、新鮮な^{まなざ}眼差しで活写している。それが、100年以上経った今、貴重な情報となっているのである。

同書は、各国の生活事情を紹介する My Year シリーズの一冊として、英国ロンドンの Mills & Boon 社が出版した。米国ニューヨークの James Pott 社も共同版權を得て刊行し、欧米圏の人々に広く読まれた。海外では、現在でも複数の図書館で配架が確認される。さらに、2018 年と 2023 年にも復刻本の刊行が相次ぐなど、今なお読み継がれるべき名著となっている。山口のことを世界に広く発信したという点では、ガントレット^{しの}を凌ぐ影響力といっても過言ではない。

私には、もう一冊どうしても読みたい本があった。

このたび日本語に訳した『Work and Play in Yamaguchi Ken』である。先述の原田豊次郎の講演録によれば、米国人のジェシー E. モンクリフが長門峡のことを「モスト ビュチフル スポット」(most beautiful spot) と絶賛しているらしい。

長門峡の観光開発史に詳しい山口県文書館の浅川均専門員の御教示で、モンクリフの英文エッセイの一部が『防長新聞』に抜粋掲載されていることを知った。そうすると、ますます好奇心が湧いてきて、原本を手にとって全文を読みたくなる。

さまざまな手を尽くして国内図書館での配架状況を調べてみた。しかし、小部数の非売品であったためか、ついに配架が確認できなかった。唯一、山口高商時代の図書カードに登録が確認できたものの、現在は原本を確認できないとの回答だった。

原田講演録(前述)の記述から、神戸福音印刷(本書 9 頁のコラム参照)の発行であることがわかったため、同社の事績やキリスト教史に詳しい専門家や、神戸の教会関係者にも取材を試みた。しかし、とうとう同書を探し出すまでには至らなかった。

それから一年が経ったある週末のこと。市内のレストランで昼食を取ろうとしていた私は、待ち時間にスマートフォンで検索してみた。すると、横浜の外国人向け古書店で同書が売りに出ているではないか。数ヶ月前にはなかった情報である。

本文わずか 34 頁の小冊子ということは分かった

けれど、片手だけでは足りない金額である。しがない^{しょみん}庶民には、さすがに勇気が要る。買うべきか、買わざるべきか。高鳴る気持ちを抑えつつ、すぐに古書店に連絡を入れ、同書を取り置いてもらった。店主が一週間ほど海外へ行く用事があるので、その帰国までに購入の判断をせねばならない。

県内の公立図書館のいくつかに情報提供をして公費購入の打診をしてみたものの、短期間での対応は難しいようだった。こうなったら、個人で買い求めるしか^{みち}途はない。意を決して家族に相談したところ、意外にもすんなりと了承された。

時折しも、植物学者の牧野富太郎をモデルとした NHK の連続テレビ小説『らんまん』が放映中であつた。大学の研究室を追われた万太郎(神木隆之介演じる主人公)が高額のドイツ製石版印刷機を私費購入するシーンが流れたばかりであつた。これを視聴して涙した^{なみだ}余韻^{よいん}が、貴重本の購入を後押ししてくれたのである。^{つま}妻や子供たちの温かい理解と NHK には、心から感謝している。

さて、『Work and Play in Yamaguchi Ken』(以下、WPYK と略す)に目を通して分かったことといえば、山口高商の図書カードではガントレットの編集のようになっているものの、正しくはサンダースが編者であつた。「序言」の執筆もサンダースである。

筆者の購入本の見返し部分には、サンダースの名前に下線を引いたうえで「編者御礼」(原文では“compliments of Editor”)とのペン書きがある。その筆跡は、私が購入した MJY との筆跡比較から、サンダースの肉筆と判断できる。おそらくは、彼と付き合いのある人物に献本したのだろう。

WPYK は、山口県内に住む、御雇い外国人仲間に呼びかけて編んだ小文集で、彼らの見聞録や^{しんしろく}紳士録などを収録する。そこで示された話題の多くは、サンダースの『My Japanese Year』(以下、MJY と略す)にも同様の記述が確認できる。

たとえば、MJY の第 1 章「ヤマグチ 一山々の入り口」では、日本への赴任^{ふにん}が決まったばかりのサンダースに、友人が語りかける場面から始まる。

東京や横浜・神戸へ^{おもむ}赴くと思いきや、山口に行くと答えたサンダースに対し、まるで宇宙^{かなた}の彼方へ行くかのように受け取った友人たち。彼らの態度が急によそよそしくなったと記したうえで、山口の

地勢や歴史・文化が徐々に語られ始める。

西洋を手本とした近代化が急速に進む日本にあって、古い歴史や文化・自然が残る「手付かず」の地として山口を位置づける点で、WPYKでのサンダースの「序言」やモンクリフの随想「原付自転車で巡る山口県」（本書2頁）と通じるものがある。また、同章の後半部分は、ショペンの随筆「山口県の歴史」（本書20頁）にも類似の記述がある。

このほか、日露戦争で、東郷平八郎率いる連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を日本海で撃破した際、その砲撃音や衝撃波が萩の町中まで伝わってきたという逸話を紹介する。WPYKのモンクリフの随筆「私の隣人」（24頁）の記述から、ビリオン神父の実体験が情報源であったことがわかる。

MJYの第4章「日本の宿屋」は、山口阿東地域の溪谷（後の長門峡）を友人たちと共に探索する内容である。その入り口近くにあたる御堂原^{みどうばら}の日本式旅館（原屋旅館）での体験談も面白い。

このうち、長門峡をめぐる提言は、モンクリフ「原付自転車で巡る山口県」（前出）の主張と類似する。九州の耶馬溪^{やまけい}を上回る溪谷美と絶賛したうえで、観光資源としての価値を見出している。ガントレットだけでなく、サンダースやモンクリフもまた同地を訪れ、魅力発信に努めたのである〔北島2023〕。

MJYの第5章「言語について」は、日本語の難解さや、日本式英語^{こっけい}の滑稽さが御雇い外国人の目線から語られる。

このうち、後半部分については、WPYKのガントレットの随筆「愉快な気持ちー日本式英語を読む」（22頁）と同じエピソードを見出すことができる。

たとえば、シェークスピアの戯曲^{ぎきょく}に多用される「なんてこった」（oath）や「こん畜生^{ちくしょう}」（Almighty）という罵り言葉の意味を試験で問うたところ、実現に向けた「全能の神」（Almighty）への「誓い」（oath）と迷（名？）解答した日本人学生がいた。彼の真剣な顔を想像するだけでも、笑いが込み上げてくる。

MJYの第7章「洞窟のある地域」は、県央部の秋吉地域周辺の洞窟や滝などの景勝地を訪ねてサンダースが旅する内容である。実名こそ記さないものの、ガントレットが同行したことが窺^{うかが}い知れる。WPYKのガントレットの随筆「洞窟のある地域」（前出）と記述内容が重複する〔北島2025〕。

MJYの第9章「萩を訪ねて」は、萩中学校講師のモンクリフ（後に山口商高に移籍）を頼ってサンダースが萩を旅するという内容である。このうち、笠山^{かさやま}を訪ねたり、ビリオン神父と出会うくだりは、WPYKのモンクリフ「原付自転車で巡る山口県」や「私の隣人」と内容が酷似する。

MJYの第17章「宗教的行為」は、WPYKのサンダース随筆「日本の宗教」（本書30頁）を大幅に加筆拡大した内容となっている。彼らにとって異教である仏教や神道に対しても、真っ向から否定せず、独自の理解や解釈を試みている。

以上で見たように、サンダースの編集か単著かという違いはあるものの、WPYKとMJYとはきわめて密接な関係にあったことがわかる。

MJYの刊行は1915年だが、序文執筆の日付は1914年5月3日であり、同年刊行（奥付がなく、それ以前の可能性も残る）のWPYKとは時間差がほとんどない。サンダースの単著MJYの発行に向けた試作的小冊子としてWPYKを位置づけることができる。

最後に、サンダースらが両書を世に送り出した動機について述べてみたい。

当時、日本滞在中の外国人必携^{ひつぺい}の旅行案内書であった『マレーの日本案内』（Murray's Hand-Book for Japan）の第七・八版で「山口には見るべきものがほとんどない」と酷評^{こくひよう}されたことへの反発が大きい（本書6頁コラムを参照）。

ただし、サンダースたちは賢明であった。むしろ、こうした世間一般の評価を逆手に取り、西洋文化の及んでいない、古き日本の面影^{おもかげ}を伝える理想郷として山口を位置づけ、その魅力発信に努めたのである。

今、両書に登場する場所を探訪して、100年前のことに想いを馳^はせると、さまざまな感情が込み上げてくる。失ったものの多さに気づく一方で、今も変わらぬ情景が広がっていることもある。

時として日本人たちから好奇や敵意の眼差しを向けられながらも、山口の自然や文化をこよなく愛した御雇い外国人たち。彼らの活躍については、地元山口でもほとんど知られていない。しかし、それで本当に良いのだろうか。

ニューヨークタイムズ紙の「2024年に訪れるべき世界の52か所」の第3位に山口が選ばれた今、本書が彼らを再評価するきっかけとなれば幸いである。

【参考文献】

- 赤井 励 1995 『オルガンの文化史』 青弓社、東京.
- 浅川 均 2022 「長門峡が顕彰された頃 ―大正時代の名勝指定の向こうに―」 『山口県文書館研究紀要』 第 49 号、99 ～ 121 頁、山口県文書館、山口.
- 金折裕司 2009 「“長門峡” と高島北海」 『応用地質』 第 50 巻第 5 号、295 ～ 304 頁、東京.
- エドワード L. ガントレット 1912 「秋吉瀧穴探検談（一）～（九）」 『防長新聞』 明治 45 年 8 月 20 ～ 25・27 ～ 29 日号、防長新聞社、山口.
- ガントレット恒 1949 『七十七年の思ひ出』 植村書店、東京.
- 北島大輔 2023 「長門峡を世界に発信した男：トマス H. サンダース『My Japanese Year』を読む」 『山口県地方史研究』 第 130 号、37 ～ 47 頁、山口県地方史学会、山口.
- 北島大輔 2025 「お雇い外国人がみた秋吉 ―トマス H. サンダース「Cave District」を読む―」 『秋芳町地方文化研究』 第 61 号、1 ～ 20 頁、秋吉町地方文化研究会、山口.
- 藏本隆博 2011 「E・ガントレットの洞窟探検の足跡」 『秋芳町地方文化研究』 第 47 号、14 ～ 22 頁、秋芳町地方文化研究会、山口.
- 藏本隆博 2015 「〈新資料〉 E・ガントレットの中目覚への手紙」 『秋芳町地方文化研究』 第 51 号、3 ～ 14 頁、秋芳町地方文化研究会、山口.
- 原田豊次郎 1923 「長門峡に就て ―東京地學協會主催講演会に於ける講演の要旨―」 大同印刷舎、山口.
- 宮沢賢治 1986 『宮沢賢治全集 1』 筑摩書房、東京.
- 宮沢清六 1987 『兄のトランク』 筑摩書房、東京.
- 山田耕筈 1951 『山田耕筈 自伝若き日の狂詩曲』 講談社、東京.
- 渡邊貞幸 2016 「館長コラム 16」 『出雲弥生の森博物館だより』 第 22 号、4 頁、出雲弥生の森博物館、島根.
- Basil H. Chamberlain & W. B. Mason 1907 "Murray's Hand-Book for Japan" 8th ed. Kelly & Walsh, Ltd., UK.
- Basil H. Chamberlain & W. B. Mason 1913 "Murray's Hand-Book for Japan" 9th ed. Kelly & Walsh, Ltd., UK.
- Thomas H. Sanders ed. 1914 "Work and Play in Yamaguchi Ken" Fukuin Printing Co., Ltd., Kobe.
- Thomas H. Sanders 1915 "My Japanese Year" Mills & Boon, Ltd., UK.

書名 『^{ワーク} ^{アンド} ^{プレイ} ^{イン} ^{ヤマグチ} ^{ケン} *Work and Play in Yamaguchi Ken*』
日本語版 (^{おやと} 御雇い外国人がみた山口)

編集 トマス H. サンダース

執筆 K. S. ビーム
M. E. ショペン
C. G. デイットマー
T. H. サンダース
J. E. モンクリフ
G. E. L. ガントレット

日本語版 翻訳・解題・DTP・発行
北島大輔 (kesadasuki46@gmail.com)

イラスト 早川和子

印刷製本 いづみプリンティング

発行日 2025 年 8 月 28 日 (初版・限定 50 部)

原書は 1914 年に神戸福音印刷から発行された。